
白猫

檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白猫

【Nコード】

N0950U

【作者名】

檸檬

【あらすじ】

最強美少女 × 俺様総長様

白猫 × 黒虎

一一

「お前の笑顔をみせろ」

「なにいつてるの？笑ってるよ」

「．．．．．ず．．鈴！！」

「ん．．．何．．」

う．．．重い．．．．．

「鈴、おはよ」

わー、朝から暑苦しいね。

「おはよ、知音。玲音は？」

絶対いると思うんだけど．．

「じー」

「んにゃ！？」

み、耳にふーってしないでー！！

「可愛いーね鈴」

この変態発言するのが、れおん峯崎玲音
私を起こしたのが、しおん峯崎知音

そしてこのシスコン双子の妹がわたし．．．
峯崎鈴です！！

「ねえ鈴」

「なあに？」

知音に呼ばれて上を向いた瞬間．．．

「んツ．．．んあ．．．ふ．．．う．．．」

「鈴ごちそーさま」

キスされました。

「ずりー！！俺まだしてない！！」

グツと玲音に引き寄せられて、

「んや．．．っ．．．．．ふあ．．．んんツ」

玲音と知音が昔言ってた。

キスは挨拶だ！！って。

「鈴、感じちゃってんのー??」

．．．感じる？

取り合えず玲音のにやけ顔がキモい。

「．．．何を感じるの？」

喜怒哀楽？

「ん？だあかああらあ気持「ああああ！！」
．．．．．んだよ知音」

いきなり叫んで立ち上がった知音をみた。
どうしたんだろ？

「学校！！遅刻するっ！！！」

現在時刻は8：10ジャスト。
後、10分で行かないと遅刻．．．だっけ？

「二人共頑張ってね」

「は??」

見送ろうとするとなににいつてんのこいつ
みたいな目でみられた。

「鈴・・・忘れたの?」

何を忘れたか言っつてよ知音。

「鈴は忘れっぽいからなあ」

同じく玲音も何!?

「今日から鈴も学校だよ」

・・・はい?

「わ、ワンモア プリーズ・・・?」

え？え？？？

「鈴毛学校！！」

そんなわけな
・
・
・
くないんだ
・
・
・

「え……ち、遅刻じゃん!!!!!!」

[illegible]

「あれえ……?」

あの後ダッシュで学校に来て二人は教室に
私は理事長室に……。いくはずだった。

「広すぎ!!」

キヨロキヨロしながら歩いてた私は前なんて見てなくて、気づかなかった。

ドンッ

「ったあ．．．」

「いつて．．．」

前にいた人に思いっきりぶつかった。

「あ．．．ご、ごめんなさい！！大丈夫ですか？！」

「大丈夫だ．．．お前こそ．．．ッ．．．」

その人は顔をあげた瞬間固まった。

「．．．？っあ！！肘、血がでてる！！」

確か．．．ポケットに．．．あつた！！

「待っててくださいね！！」

近くの水道でハンカチを濡らした。
それで肘をふいた。

「って……」

「しますか？もう終わりますから」

絆創膏を貼って……OK!!

「ほんとすみませんでした。では!!」

また理事長室を探そうとしたとき、

「……お前、名前は？」

あ、そうだね。名前わかんないやつに喋りかけられてもこまるよね。

「藤宮鈴です。あなたは？」

とっさの偽名。素性バレると困るんだよ。

「……氷川 杏^{きょう}。お前、見た事ないな転入生か？」

「はい。理事長室に行きたいんですけど・・・」

改めて見ると杏さんって男の人なのに綺麗。

イケメンには免疫があるからどうも思わないけど
知音とか玲音とかで。

「連れてってやる」

「え！？杏さんありがとうございます！！」

やー・・・不良校でもいい人はいるんだね！！

ってあれ？杏さん、不機嫌・・・？

やっぱ案内嫌だったとか？

「・・・杏」

「え？」

「杏って呼べ。敬語もやめろ」

杏さ・・・杏は俺様！？超命令形だよ？？

「う、うん．．．ねえ杏って何年？」

スタスタ歩いてく杏の後ろをついてった。
多分、理事長室に連れてってくれる。

「1年」

「同年！？年上かと思ってた」

「．．．．．。」

「．．．．．。」

．．．．．会話が續かないー！！！！

いつもは玲音と知音がいるからこんな事ない！！

「うう」

一人で唸ってたらある大きな扉のまえで
止まった。

「ありがとう」

「ああ」

前で杏と別れて理事長室をノックした。

「しつれ．．．」すううずうう！！」「にゃ！？」

．．．．．んかが、飛んで来た。

「駿？！」

「おう！！久しぶり、会いたかった。
って事で．．．わかってるよな？」

「なに．．．んんツ．．．！！っは．．．ふあ．．．」

そっだった、駿も”挨拶”する人だった。

「駿―てめえが早く来いっつったから
来てやったのにいつま．．．鈴？」

神到来！！まじで抱きしめられすぎて死ぬ
寸前だったよ！？
三途の川の向こうでおじいちゃんが手振ってた！！

「はあ．．．転入生って鈴の事か？」

てかこの神だれ？後ろに立ってるから姿さえ
見えないんだけどー。

あ、神だから見えないの？じゃあまじで神！？

「ごめん鈴に会うの久しぶりだったから
激しく（？）しちゃってて」

駿って神と会話できるの！？凄！！
今度やりかた教えてもらおう！！

「はあ．．．HR始まるから早くしろ」

でもこの神の声なんか聞いた事ある．．．

「はいはい。鈴、行っておいで。

いつでも理事室来てね」

くるつと神をみると．．．

「紅うう！！？紅って神だったの！？」

まさかの紅。てかよく教師になれたね？
体育だけ5であとは全部2だった紅が．．！！

「あ？何言ってんだ。さっさと行くぞ」

腕引つ張らないでー！！！！

あなたの脚と私の脚比べてみてよ！！
長さが全然違うでしょおがああ！！

「鈴．．．髪、いいのか？」

え、髪？ああ、髪ね。

「んーバレルかな？？」

私の髪はミルクティーの色。
地毛だけどね？

玲音も知音もおんなじ色。

バレたらマズイのは・・・まあ色々理由がある。

「さあ？」

「じゃ、いいでしょ？」

めんどいしめんどいしめんどいし？

「俺が呼んだら入って来いよ」

「はぁーい」

・・・わお。

紅が入ってつた瞬間煩い教室が静かに。
生徒達に何をしたんだい？

「鈴、入れ」

はーっい！！

スタスタ・・・

な、何！！？そんなにじろじろ見ないでー！！

「自己紹介しろ」

この中で！？この熱い眼差しの中で話せと？！

「えと・・・藤宮鈴です。よろしくね・・・？」

このカラフルboy'sがよろしくする？？
まあ、してくれないほうがいいけど。

「「「「「・・・可愛いイイイ！！！！！！」」」」」

「鈴ちゃん!! 彼氏はある!？」

「俺と付き合つてー!!」

「てめえ抜け駆けすんな!!」

彼氏がいる顔に見えますー??
いるわけないじゃん。 . . . 今は。

「紅 . . . ? 席は？」

何故か不機嫌な紅。眉間の皺が . . . !!

「 . . . チツ 窓際の後ろ」

舌打ちイイ!!!? 何怒ってるわけ!?

「あいあいさー」

面倒なんでスルーしちゃおう。
うん、それが一番いいよ!!

「あれえー．．．？？」

なんで私の席の周り空席なの？

あ、私があんま関わりたくないの知ってて

紅が配慮してくれたとか！？

「んぬー．．．眠．．．い．．．」

久しぶりに朝に起きたもんなあー．．．

最高に眠い．．．

紅の授業だし．．．いいよね．．．

「ちよっ鈴ちゃん！！寝たら殺されるぜ！？」

「やべえよっ」

みんななんか言ってるけど聞こえない．．．

「おやすみー．．．」

瞼を下ろした。

生徒 side

「おやすみー．．．」

うわああ．．．やべえよ！！
紅さんの授業で寝たら死ぬ！！

「す、鈴ちゃんっ」

駄目だ、完全寝てる．．．
うわっ紅さんが気付いた！！

「あ．．．！！？」

まじ．．．？アノ紅さんが．．．？
鈴ちゃんを優しい顔でみて撫でてた．．．
紅さんが居眠りを怒らない事よりも
女をあんな顔でみて触れてたほうが驚き。

（（（鈴ちゃんって何者．．．？）））

クラスの心がリンクした瞬間。

「．．．き．．．．．ね．．．て」

「．．．んー．．．．．」

だあれ？

「おはよーございますう．．．」

「あははッもう5時だよ？」

あれ？返事が帰ってきた．．．
つて．．．ん???5時?five?!

「えええ!?!5時!?!」

「うん。てか君だれ?俺は西条呉羽」

なんか凄い爽やかだこの人・・・

「藤宮鈴です。起こしていただいて
ありがとうございました」

呉羽さんにお礼を言って帰・・・れなかった。

「あの・・・？」

呉羽さんに腕を掴まれたから。

あのさ、男の人って腕掴むの好きなの！？

「あ・・・ごめんね。・・・俺の事知らないの？」

はい？？初対面の人に知られてたら怖くない！？

「俺、火焰って族の副総長なんだけど・・・」

かえん？？何それ。
でも族って・・・いろいろやばい。

「あ、知ってますよ？」

副総長つてすごいですねえ!!」

とりあえず、嫌われなきゃ。

「．．．．．そうでもないよ」

呉羽さんの眼が鋭くなった．．．って事は．．．
成功!?ま、媚売る女は嫌だよね。

ツバン!!

「「鈴ー!!」」

あのねえ．．．ドアぶっ壊れるよ?

「知音ー!!」

「おっと．．．」

教室に来た玲音と知音。

玲音は無視で知音に抱きついた。

「よしよし。鈴学校どう？」

「あのねー・・・寝てた!!」

今日寝るしかしてないし。

「鈴ー!!俺は!?!なんで知音なんだよー!!」

「煩いなあ。知音がいいんだもん」

だって玲音煩いし。

「・・・・・・・・玲音？」

「あ？」

ん？玲音と呉羽さんって知り合い？

「おー呉羽じゃん。鈴と同じクラスか」

「玲音、鈴ちゃんと知り合いなの?」

玲音、そのニヤリ顔やめてよ。
きもい。

「おう。俺らの大切な女だ!! 惚れるなよ?」

何言ってるの? この人が惚れるわけないでしょ。
さっき媚女のフリしたんだから。

「ありえないよ。そんな媚売るような子。
てゆうか玲音って女嫌いでしょ?」

ほーらね。大成功。

「あ”? 呉羽... 鈴が媚なん... バシッ
痛ってえええ!! 知音なにすんだよ!!」

さすが知音、わかってるねえ。

「玲音が馬鹿だからだよ。ほら帰るよ？」

「．．．呉羽、鈴を貶すと．．．殺すよ?。」

怖いよー?? 知音さん。

「じゃあな!! 呉羽、また明日な!!」

．．．．．――――

呉羽 s i d a

誰もいないと思つてた教室に、
一人の女の子。でも．．．寝てる。
そついや昨日紅さん言つてたっけ．．．

「起きて。ねえ、起きてー」

顔が見てみたくて、おこした。

「．．．んー．．．．．」

「おはよーございますう．．．」

ツ．．．．¥¥¥¥可愛い．．いや、綺麗？

「あははッ もう5時だよ？」

平静を装って彼女に話しかけた。

「えええ！？5時！？」

声も綺麗。

全部が綺麗な女の子。

「うん。てか君だれ？俺は西条呉羽」

この子はなんか他の子と違う気がした。
なんでだろう？

「藤宮鈴です。起こしていただいて
ありがとうございました」

もしかして俺の事知らない？

「あの．．．？」

帰ろうとした鈴ちゃんの腕を掴んでた。
無意識に。

「あ．．．ごめんね．．．俺の事知らないの？
俺、火焰って族の副総長なんだけど．．．」

もしかしたらこの子ならって．．．

「あ、知ってますよ？」

副総長ってすごいですねえ！！」

でも結局同じだった。
外見がケバくないだけ。

「．．．．．そうでもないよ」

鈴ちゃんに向ける眼が冷たくなったのが
自分でもわかった。

ツバン！！

「「鈴ー!!」」

教室の扉が荒々しくあいて見えたのは、
火焰の幹部である玲音と知音。

（双子の苗字は偽名だよ!! by 檸檬）

「知音ー!!」

鈴ちゃんは知音の方に抱きついていった。

「おつと・・・」

それをなんなく受け止めてにこにこしてる
知音。

「よしよし。鈴学校どう？」

知音のこんな顔、みた事ない。
女を見る眼はいつも冷たかったのに・・・

「あのねー・・・寝てた!!」

それに答える鈴ちゃんも俺と話してた時より自然体。

「鈴ー！！俺は！？なんで知音なんだよー！！」

玲音が・・・狂った？

「煩いなあ。知音がいいんだもん」

俺には媚売ってきたのに玲音には冷たい？
鈴ちゃんが、わからない・・・

「・・・・・・・・玲音？」

それと、気になる点がもうひとつ。

「あ？おー呉羽じゃん。鈴と同じクラスか」

「玲音、鈴ちゃんと知り合いなの？」

そう聞くとニヤツと笑って、

「おう。俺らの大切な女だ！！惚れるなよ？」

そこら辺の女と同じなのに。

「ありえないよ。そんな媚売るような子。
てゆうか玲音って女嫌いでしょ？」

どうして女嫌いの双子に好かれているのか。

「あ”？呉羽・・・鈴が媚なん・・・バシッ
痛ってえええ！！知音なにすんだよ！！！」

玲音がなんか言いかけたのを知音が殴った。

「玲音が馬鹿だからだよ。ほら帰るよ？
・・・呉羽、鈴を貶すと・・・殺すよ？」

相変わらず、怖いなあー

「じゃあな!! 呉羽、また明日な!!」

静かになった教室。

「鈴ちゃんって不思議だねー・・・」

「あゝもう！！玲音の阿呆ー！！！！！」

変な登場ですいません。

ここは屋上です。んで叫びました。

「嫌がらせだよね！？むーかーっくー！！！」

玲音が私の朝ご飯になるはずだった

大大好物のクリームパンを食べたんだよ！？

「うつざーい！！ほんとムカ「うるせえ・・・」」

誰だよ！！ストレス発散邪魔するやつ！！

「イラついてるんだから仕方ないでしょ！！！」

「睡眠の迷惑だ」

「知るか!! 別の所で寝て!!」

「嫌」

こいつもムカつくっ!!

「私も寝る!!」

不貞寝してやる!!!!

「つきゃあ!?!」

こいつなんなわけ!!?! 意味わかんないし!!

「お前．．朝の奴．．」

朝? なんの事ですかー!!?
記憶力悪いんで、すみませーん。

「藤宮鈴、だろ？」

どうやらこいつのいつてる事は正しいらしい。
どうやって会ったかは思い出せー・・・た！！

「朝ぶつかって理事室連れてってくれた人！！」

えーっ・・・と名前はたしか・・・

「杏！！ごめんねーちょっとイラついてて」

すっきりしたよ。

「なあお前が叫んでた玲音って荒井玲音？」

むう・・・気に入らない。

「お前じゃなくて鈴！！」

「・・・鈴」

うん、O K。お前って呼ばれるの嫌い。

「そつだよ。玲音。むかつくんだよー!!」
杏こそ玲音知って・・・バンッ

あんさゝ私のセリフ遮りすぎ。

「「あー!!」」

「「鈴見つけた」」

あれか？えーとなんだっけ？
噂をすれば・・・ってやつ。

「鈴、ちゃん・・・？」

あ、私が嫌いな人ー！
呉羽さん、だよな？

「あの玲音か？」

「うん。あれ」

でもA11無視で杏と会話。

「鈴ー．．．まだ怒ってんの？」

「あたりまえでしょ」

「なあーごめんって．．．」

クリームパンの恨みは怖いんだぞ！！

「鈴ーっ玲音はどうでもいいけど
俺まで放置しないで．．．」

知音と玲音は顔しか似てないよ！！
だって知音には可愛げがある！！

「うんっ．．．」

ってあれ？呉羽さんは火焰で．．．
玲音と知音も火焰で．．．って事は．．．

「杏．．．もしかしくても火焰．．．？」

「ああ．．．」

My crass roomにget toしよう。

「さよなら」

「「ええー．．．」」

双子兄貴は無視して、でてった。

「駄目なんだよ．．．私に関わっちゃ」

ぽつりと独りで呟きながら。

「．．．よ！！．．．ざ．．．」

「っ！！！！．．．あ．．．！！」

んん？？なんか聞こえる？

あ、あれかな。わー初めて見たあ！！

リンチ！！しかも体育館裏って超定番！！

「うぜえんだよ！！」

あれーパンダって喋れるのー？？（笑）

まあ今イライラしてるしパンダもムカつくから助けに行こつと。

「先輩？？なにしてるんですか？」

恐らく先輩。だって老けてるし！

「あんた例の転校生？今こいつ締めてんの。
やられたくなかったら失せな！！」

「あのおゝ私もやっていいですかあ？」

苛ついてるからね

「いいわよ」

そういうとパンダ達は腕を振り上げて
女の子を殴ろうとした。

「ッ．．．！！」

「おーっと危ないですよ先輩」

それはあたりまえに受け止めたけど？
女の子は助けられて驚いてるみたい。

「つてめえ邪魔すんな！！」

「乙女が口悪いですよぉ〜?」

わざとふざけたように言ってみた

「やだーそんな見つめられちゃうと

鈴恥ずかしいーっ!」

「睨んでんだよ!」

知ってますけどー!!

でもパンダに睨まれても怖くないんだよ。
白目消えて爆笑しそうだしっ

「さっさと消えてくれませんかあ?

じゃないと殺しちゃうかもっ」

すこーしだけ。ほんと1000分の1もないくらいの
殺気をだしていった。

「ッ調子にのんな!!ヤレ!!!」

パンダか猿かどっちかにキャラ留めて〜

パンダ猿？新種

「遅いんだって．．ばっ！！」

パンダBの拳を受けとめて鳩尾殴った。
ぜんっぜん力いれてないけど。

「チッ！！ふざけやがって！！」

言葉だけきけばオトコだけどパンダC！！

「ふざけてる奴に仲間やられたわけ？？
だっさーい．．．」

と言いつつ蹴る私（笑）

「ひ、ヒイイー！！ごめんなさい！！
許してくださいっ！！！！」

許しを乞うパンダA。

．．．これだから嫌いだ、人は。

「無理、かなあ」

殺気をもうちよいプラスして言うと、
気絶しちゃった

「あ、あのっ．．．ありがとうございます」

「いーえ。てか大丈夫??」

可愛い黒髪ボブの女の子。

「名前、教えてくださいか．．．?」

かーわいー♪

なんかプルプル震える小型犬!!

「藤宮鈴だよ!!あなたは??」

「本城由那です．．．」

んー．．．この子同学年だね?

「敬語なし!!あと鈴って呼んでね?」

「・・・う、うんっよろしくね鈴!!」

笑うとさらに可愛いー!!

「由那はさ、なんでいじめられてるの?」

だって理由がない。

火焰というわけでもなさそうだし・・・

「実はね私ー・・・」

あーなるほど。嫉妬だねようするに?

由那は本城グループの一人娘で

それが気に食わないらしいパンダ共が・・・

「でね、峯崎コーポレーション知ってる?」

ビクッ・・・

「うん知ってるよ・・・?」

だって私の家だし。

「その傘下なの」

へー知らなかったよ。

今の峯崎はお父さんだしねえ」

「へー。でも由那は関係ないよね?」

高校生とはまだ関係ないはず。
それに本城は茶道の家元だ。

「周りはそんな風に見てくれないの・・・」

金持ちなんて大体三種類。

- ・子供を利用する親
- ・自分の力で会社を大きくする親

ちなみに峯崎も本城も後者だ。

「・・・・・・・・。」

由那は他の奴らとは違う。

でも私は怖いんだ。大切なモノを作って失うのが・・・

「鈴・・・・・・・・？」

明るいつりしてなきゃいけないんだ。そうじゃないと人を信用してないってバレちゃうから。

「由那、私は由那を見るよ」

それでも由那を一人にできないから。

「私つ・・・・鈴と友達になりたいッ・・・・」

由那も知ってるから。

一人の、孤独の怖さを――・・・・・・・・

「いいよ」

そう言って手を握ると、泣き始めた。

「ありがとうっ!!」

「ほらー可愛い顔が台無しだよ?」

いつか全て話せるかな?

「鈴のが可愛いよ!!」

家の事、私自身の事も・・・

「え?ないない!!」

今はまだ言えないけど・・・待っててね。

「そおなんですかあ」

でも媚び女のイメージは崩せない。
だから甘ったるい声で話す。

「うん。出てってよ」

殺気でてるよ？怖くないけど（笑）

「ヒッ・・・す、すみませんっ」

まあ出てける理由ができた助かりました。
怯えたフリしたけど怯えてないし。

ダダダッ

教室まで猛ダツシュ。

今は放課後で教室には誰もいないから。

「っっぜエエエ！！！！！」

入った瞬間叫んだ。
だってム力つくし。

「媚び女のフリしてるこつちも疲れるっつーの
嫌われる方がいいけども！！
あのウザさ半端ないし！！！！！」

ぐっちぐち嫌味言いやがってさあ！？

ガラ・・・

「なんで私が媚び売らなきゃいけないわけ！？
関わりたくもないっつーの！！
変に目立つのもウザイからやってるだけ
だし！！！」

「・・・・・・。」

「玲音と知音が族はいつてるとか初耳だし！？
こつちに隠し事するなって言うくせに
自分等はいいいのか馬鹿双子ー！！！」

「・・・・・・。」

「つーか杏も自分で連れてっっておいて放置？

そのおかげで嫌味言われるこっちの身にも
なれー！！！！俺様野郎がー！！」

「．．．す、鈴ちゃん？」

え？人？人の声がする。

「あー．．．もう、ストレスで幻聴が．．．

まじふざけんなあのエセ紳士が」

エセ紳士＝呉羽さんっていう方程式。

「酷いなあ」

あはっ まじ耳鼻科行こうかな？

「鈴ちゃん、叫んでたのって本音だよな」

うつわー最悪。聞かれてたし。

一番聞かれちゃマズイ人、呉羽さんに。

「そうですね」

「やっぱり鈴ちゃんは違うんだね」

あの、この状況ナニ？

「呉羽さん離してください」

なぜ呉羽さんに抱きしめられてる？

「ねえ玲音達に隠し事してないの？」

めっちゃ話それたよね？
スルーされちゃったよ。

「・・・いや、してますね」

それに答える私って・・・

「してるんだ？」

うん、してる。バレると面倒だから。
2、3個だけど結構重い事。

「はい。とりあえず離してください。
ウザイです」

暑苦しいよ。まだ春だけど？

「んゝキスしてくれたら離してあげる」

え、そんな事？

チュッ

「離れてくださッ！？・・・んんッ・・・」

「馬鹿でしょ・・・鈴ちゃん・・・」

離れようとしたら引き寄せられてまたキス。

「．．．く．．．．．れは．．．さ．．．ッふ．．．．．」

「だーめ。くれはって呼んで」

ほとんど知らない人に玲音達みたいなキスをされたのは初めて。

「鈴ちゃんこれ俺じゃなかったら押し倒されてるよ」

にこりと笑ってさりげに爆弾発言。

「呉羽さん．．．．？」

でもその笑顔もやっぱり違和感だらけで。

「作り笑い疲れませんか？」

どうやらお節介は根っからのモノ。

「・・・ッ鈴ちゃんは凄いな」

「あ、でも私に本当の笑顔見せろとか
言いませんよ。」

関わるつもりなんてないですから」

だから嫌われててよかったのに。
族に関わりたくないから。怖いんじゃない。
ほかの族を警戒するのが面倒。

「呉羽って呼んでつてば。敬語もナシ。
あと、俺気にいっちゃったよ。
鈴ちゃんの事」

あーもう！！だから嫌だったのに。

「知らない。帰る」

「まーって！！双子との関係は？？」

ああああ・・・どっちにしろめんどくさい・・・

「・・・・・・・・・・。」

「鈴ちゃん、無視しないでよ」

わーブラックオーラでてまーす。

殺気よりそのオーラと笑顔の方が怖いよ。

「二人とも私の大切な人」

「ねえ鈴ちゃん一緒に帰ろうよ」

いきなりだね。

双子との関係の質問からとびすぎじゃね？

「はあ．．．いいよ」

だって可愛いんだもん。

第一印象エセ紳士だけど今は違う。

エセ紳士っぽさもあるけど可愛い。

「よかった」

ほら、こんな可愛い笑顔向けられてみ？
断れませーん．．．

「．．．で、これは？」

校舎をでたら眼についたモノ、
白のメルセデス。

おかしくない？なんで学校に？
峯崎にあるのは黒のだし．．．

「乗って」

．．お前のかああ！！！！
え、なんで？金持ち？？

「う、うん」

不良校金持ち結構いたりする！？
まあストレス溜まるだろうけど？

――――．．．．．

「えーっと．．く、呉羽．．？」

なぜこんな所に？つかどこだよ。

「ん？」

や、可愛いけども……
そんな事を言ってる場合じゃない。

「どこ……?」

「倉庫」

うん、知ってる。

だってでかかと火焰って書いてあるし。

「ほら、行こ」

う、うえええ!!?
なんでええ!?

「ちょ、呉羽っ降ろしてよ!」

横抱き……所謂お姫様抱っこをされてる。

「やだ」

う”…………そんな眼でみないで…………

「「「「「黒羽さんっちわっすー!」「「「「「

声ピツタリッ

合唱させたら完璧じゃね?

「ただいま」

っーか視線キツイっすー!!マジがん見!……!

「……………すー……………!!!?!?」

む、聞こえたぞ。

「んーっと……………あー!!!!!!……!」

みっけ!!

「はるっ！！」

「わっ！？」

呉羽から飛び降りると呉羽が声をあげたけど無視して、

「はるーっ！！」

はるに飛びついた。

「なんでここにいるの？」

「呉羽に連れてこられたの」

椎名春樹こと、はる。

私の・・・仲間？大切な人。

「鈴ちゃあゝん」

はるに抱き付いたままでいると呉羽がきた。

「呉羽さんこんにちわ」

「あれ春樹、鈴ちゃんと知り合い？」

てゆうか離れてよって言ってるけどヤダ。

「はい。すー離れて」

「やだ」

はると会つの久しぶりだもん。
それにはるは玲音達と違う落ち着く感じ
だからくつついてるのが好き。

「鈴ちゃんこっちおいで」

「やだ」

ガチャ

なんか扉があく音がした。

「呉羽、なにやってる」

「いや、鈴ちゃんがこっちきてくれない」

「・・・鈴？」

階段を降りる音。

「ー・・・鈴」

ピクツと耳が反応した。

「ん？」

「離れる」

仕方なく離れた。裾掴んでるけど。

「こっち来い」

「えっはるがいい」

「ちよつ、すー!」

「上に知音いるぞ」

「はる」

「はぁ・・・」

知音がいる。玲音もいる。って事だからやだ

「春樹、来い」

「え、いいんですか？」

「幹部補佐だろ。いい」

へーはる幹部補佐なんだ。強いんだね。

「すーおいで」

「んにゅー」

はるの横を歩いて幹部室つばいところに来た。

入っていいのかな？まあいいよね。

「おー春樹いーって鈴ー！！」

「うるさい玲音」

こなければよかったあゝ．．．
家でもうるさいし．．．

「ところで春樹はどうした？」

「いや、それは．．．」

「鈴ちゃんが春樹から離れないんだよ」

なにか文句でも？？
だって離れたくないもん！！

「春樹好きだからねー」

「春樹ばっかズリーぞー！！」

知音の言ってる事はわかるけど
玲音のズルいは意味わかんないし。

「・・・誰？」

さつきから疑問だったけどね？
あれ誰？超睨まれてる。

「那岐？ああ女嫌いだから気にしないで。
とりあえず俺んとこおいでよ」

なぎっていうの？まあ関係ないや。
女嫌いでも好かれてようとどうでもいい。

「はるゝ・・・眠たい・・・」

「寝ていいよ」

「ん・・・」

はるの膝に寝転がってギュッと掴まって
瞼が落ちていった。

――・・・

鈴が寝たあとの幹部室・・・客観sida

「春樹くなにしたらそんな好かれるの？」

鈴が春樹に懐いてるのは一目瞭然。
玲音や知音以上かもしれない。

「・・・あの、総長・・・怖いです」

杏に睨まれ続けていた春樹はたえかねて
おずおずと言った。

「あ？・・・気のせいだ」

「「や、どう見ても睨んでたし」」

すかさず双子がつつこんだ。

「すーは他人を嫌ってます。」

でも怪しまれない為に明るくする。
あ、懷けばこんな感じですよ」

鈴の髪を撫でながら春樹は言った。

「なんか・・・猫みたいだね」

「そうですね」

S i d a E n d

「．．．き．．．．．お．．．」

「ん．．．．．まだあ．．．」

「おき．．．．．き．．．．．ぞ」

「．．．zzz」

意識がまだハッキリしてない私は、
誰に起こされてるのか何を言われたのか
よくわかっていなかった。

「んっ．．．ふあ．．．や、ツんん」

「起きた??」

「れ、お．．．ん．．．．．?」

眼を開けると目の前に玲音の顔。

あれ．．．．．おかしいな、はるの膝だったのに．．．

「はる、どこ」・・・」

「下にいる」

下に行きたいけど眠くて体が動かない・・・

「みんな・・・いないの？」

この部屋にいるのは私と玲音だけで・・・

「ああ。そのうち帰ってくる」

「ん・・・そっか。もっかい寝る・・・」

「いいよ・・・いや、駄目」

その時ニヤッと笑った玲音に気付かなかった・・・

「なんで・・・ッんう・・・や・・・ちょ・・・」

「あー！！玲音なにしてんのっ」

「はぁっ・・・しお、ん・・・」

酸欠で死ぬ．．．．．

「玲音？？俺らがいないからって

駄目でしょ！！」

「お前らがどう反応するかなあって思って」

見事に固まってる呉羽、杏、那岐。

「玲音っ！！俺の鈴ちゃんに何を．．．！！」

「チッ．．．．」

「．．．．．。」

呉羽、私はあなたのものになった覚えはない。

「ボソッ．．．．やっぱいつもの女．．．」

は？なに言ってるの？？

ボソッと言ったつもりだろうけど私、
地獄耳なんで聞こえたよ、那岐？くん。

「いつもの女つて一体どんぐらいの女みて
言っただかね」

その女にはどんな女が入ってる？
どうせ何百人いるかないかでしょ？
女が嫌いなのはかまわないけど、
それをこっちにも押しつけるのはどう？

「鈴？」

知音が呼んでたのを無視して下に降りた。

「はるー．．．．？」

カラフルboyが多すぎてはるがどこにいるか
わかんない．．．．

「どー．．．？」

ふわっ．．．

いきなり体が浮いた!?

「ったく・・・何やってるの?」

「はるー♪」

はる発見!ーん?見つけられたのって私??

「総長たちのところになんでいないの?」

那岐って人が超睨んできて居心地悪い。
それに比べて、はるは居心地いいもん!!

「えへへ♪はる大好き」

今までに何回も言ってる。
まあ本音だけどね(笑)

「・・・俺の仲間んとこ来る?」

「行くー!!」

あの部屋に戻す事を諦めてくれたらしい。
那岐だけじゃなくて玲音もウザいしね！！

「春樹なにやってたんだよ．．．！？
ちよ、おい！！その子いいのか！？」

「ええええ！！総長に殺されるよ！？」

「葵、秋夜うるさいよ」

わー．．．殺すって杏、恐れられてるよ。

「はる、この人達誰？」

「紹介するから降ろすよ」

「．．．はい」

え？どっから降りるの？って？？
はるに抱きついてたから横抱きされてた。

「で、あなた達の名前は？？」

「この赤いのが葵でこっちが秋夜」

「よろしく．．．お願いします」

なぜ敬語？多分同学年でしょ？？

「敬語？タメ口でいいよ！！」

「でも．．．呉羽さんの女だし．．．」

葵の言葉にうんうんと秋夜が頷いた。
話、おかしいよね？

「違うよ？？」

「えっ！？」

いや、こっちが驚いてるんだけど．．．
いつ呉羽のになったの？？

「じゃ、じゃあ総長の・・・？」

今度は杏？！

てかね！！私、火焰に関係ないし・・・

「私、誰とも付き合っていないよ？」

「・・・・・・・・。。。」

やめて。なんでそんな何こいつみたいな
眼向けるの！？・・・むう

ギュー・・・

「はるゝ・・・」

「すーもこう言ってるしタメで話してやって」

溜息は余分だし・・・

「ああ、よろしくな！！」

「よろしくね鈴」

暫くここで雑談してると、
いきなりみんな静かになった。
どうしたのかな・・・？

「鈴、出てこい」

え、私??もの凄くいきたくない。

「すー行つて」

「やだ」

「はあ・・・総長が呼んでる」

「やだあ」

ぜーったい嫌。

「チツ・・・春樹」

「じゅめん、すー」

「っわ!!? やだっはる!! きらっ・・・むぐ」

「やるから大人しくしてて」

口につつまれたのはチロルチョコ。
おいしーんだよ、もう大好物。

「総長、連れてきました」

「ありがとな」

「いえ」

・・・うーにゅー・・・い・や・だーっ!!

「はるう・・・置いてくの・・・?」

またつままない部屋に戻るの?
やだ。絶対嫌!!

「また後で会えるから。
すー、大人しくしてて?」

「やだっ!!」

「いい子にしたらご褒美あげるから」

そう言って葵達がいるであろうところに
戻ってった。

「すーずーちゃんっ」

「……………」

「ねえってば」

「……………」

「おい聞いてる?」

「……………」

「キスするよ?」

「……………」

はるの言った通り大人しくしてる。
とつてもつまんない。
またアレが睨んでくるし?

スタスタ

「ん？鈴どこいくの？」

「……………帰る」

もう暇すぎてイライラしてきた。
置いてったはるも会いたくない。

「え！？ちょ、まつ」

呉羽を無視して幹部室をでた。

「すー！？」

倉庫をでるとき、はるにも呼び止められたけど
聞きたくないし無視。

「みんな嫌い」

暗い夜道を一人で歩いてポツリと呟いた。

「なあ姉ちゃあゝん俺等と遊ぼうよ」

「……………」

「無視してんじゃねーぞ!」

「…離して」

「調子乗ってん…っ…」

誰?折角こいつらと遊ぼうと思ったのに…
もちろん、“喧嘩”で。

「ほんとやめて。俺の寿命縮む…」

「は、る…離して」

怒ってるんだから。

「嫌」

「杏の命令?はるでも容赦しないよ」

私には勝てない。

「違う。違うから、泣かないで」

なんで私は泣いてるの？

意味のない涙・・・

「はる・・・つぶふ・・・くすぐりたい・・・んッ」

涙を舐められてくすぐったがっつると唇に触れた。

「ほら、家に帰るよ」

「うん・・・」

「はぁ・・・おいで」

「・・・っはる」

寂しかった・・・のかもね。

久し振りに会えたのにあんまり一緒にいれなかったから。

――――・・・

「ん。一人にしてごめん」

「我儘はもう言わない・・・」

はるは杏に逆らえない。

だから私が我儘言うつ、はるが困る。

あんな顔をさせたいわけじゃない・・・

「我儘なんて思ってない。

鈴はもっと頼っていいんだよ?」

十分過ぎる程頼ってる。

「ありがとう、はる・・・」

「もう寝る?俺帰るけど・・・」

今は11:00。だいぶ眠い・・・

「はる・・・一緒に寝よ・・・?」

「っ・・・なに言ってるの」

はるが帰っちゃったらこの家に一人になる．．．
一人じゃ寝れない

「．．．やっぱいい。バイバイ．．．」

でもさつき我儘言わないって言ったばっか．．．
我慢しよう．．．
玲音達が帰ってくるまで起きてよう。

「またな」

「う、ん．．」

ボタン

帰っちゃった．．．

うう．．．眠いのにな寝れないよう．．

ゴロゴロ．．．

ビクッ

「か、雷．．．!!!キャ．．．」

雷はほんと無理いいい！！！！！！
怖い、怖すぎる！！

「ふえ．．．っ．．．う．．．」

「だから泣かないでってば」

「は、るっ．．．！？」

玄関．．．開いた音した？
聞こえなかったのかな．．．雷で。

「俺、帰っていい？」

「やだ．．．玲音達がくるまで一緒にいて．．．」

帰ってくるの遅くない．．．？
まだ倉庫にいるのかな？

「あの二人今日帰って来ないよ。
倉庫に泊まり込み」

．．．帰って、こない？

「雷怖いんですよ？俺がここに泊まる。

もう寝るんだからすーの部屋行つて」

「はるは．．．？」

「一緒に寝るから」

よかつた．．．

ガチャ

「電気消すよ」

真っ暗。暗闇は落ち着くけど怖い．．．

ドンッ

「キャ．．．！！！！！」

はるもいるけど何故か離れてるし．．．
雷が結構近くに落ちたっぽい。

「．．．ッ．．．」

ここで泣いたらまた迷惑かける．．．
口を噤んで抑えた。

「怖いなら怖いつていいなよ」

その言葉を聞いた後何にも見えなくなつて
聞こえなくなつた。

はるが耳を塞いで抱き締めてくれてるらしい。

「理性保ててる俺凄い．．．」

つて呟いてる事なんて知らなかった。

「はる．．．．？」

朝、目が覚めたら隣にいたはずのはるが
いない．．．．

「どこ？」

帰っちゃったのかな？

もう朝だし雷鳴ってないから大丈夫だけど．．．

ガチャ

「あれ？すー起きたんだ」

部屋のドアが開いて寝ぐせでびよんびよん
髪が跳ねてるはるがいた。

「．．．帰ったかと思った」

「すー置いて帰らないよ」

笑って優しく撫でてくれて
私の事をよく考えてくれる。
はるにとっても安心する。

「すー倉庫いく？」

「やだ」

あ．．．ワガママ。
でもあそこは嫌だ。

「はるとどっか行きたい」

「俺は倉庫行かなきゃダメなんだ」

う”．．．我慢してはるといるか、一人か。

「はるといてもいいなら行く」

「いいよ」

人がたくさんいるのは嫌い。
でも一人も嫌い。
だからはるがいる方に。

「バイクで行くの？」

「うん。すーどうする？」

自分のに乘るか、はるのに乘るか・・・

「はるの後ろに乘る！！」

自分で運転するのもいいけど、
はるの後ろ久しぶりにだし。

「了解。乗れるよね？」

はるのバイクは大きい。
でも乗りなれてる私なら、余裕。

「ちゃんと捕まってる」

そう聞こえたと同時に走りだした。

「気持ちいい……」

はるの運転は好き。

なめらかだから風や景色をゆっくり
感じられる。

「着いたよ」

暫くばーっとしてるとついたらしい。

「今日は杏や呉羽に呼ばれても
幹部室には行かないからね!!」

「はいはい。わかってるよ」

ぎゅーっと、はるの腕にしがみついて
倉庫内に入った。

「春樹おはよーって鈴!？」

「なんで二人一緒!？」

今日も元気だなあ。

「葵、秋夜おはよ!！」

「うるさいよ二人して」

葵と秋夜はいい人だと思う。
はるの仲間だし。

「ま、まさか朝帰り・・・!！」

朝帰り? 朝帰る? まず帰ってなくない??

「まあ間違ってない」

「はるの家ここじゃないよね?」

「ここも俺の家」

第二の家って事?

はるの家は椎名組ようするにヤクザ。

峯崎組とは仲がめちやめちやいい!!

「春樹と鈴はそんな関係だったの？」

「どんな関係？」

朝帰りにそんな関係とかあるの？

「え」、だから・・・「セフレって事だよ!!」

ん？何それ。てか声デカいよ葵。

「「「ええええ!!!!?」「」」

うるさーいなんで絶叫してるの？

「葵馬鹿。違う。昨日すーの家に泊まった」

「そ、そくだよな。鈴はそんな子じゃ・・・って
泊まったああああ!？」

わぁ葵ってうざい。

「うるさい」

「鈴大丈夫か?! なんもされてないよな?」

き、気持ち悪い・・・ガクガク揺らさないで・・・

「ストップしようか葵」

止めてくれたのは秋夜。

「だ、だって鈴の唇が春樹に奪われたかもしれないんだぞ!!」

唇を奪うってキスの事?

「春樹がそんな事するわ」した」

「「え・・・?」」

「はるっ余計な事言っちゃ駄目!!」

はるの口を両手で塞いだ。

「すー真っ赤だよ？」

い、意地悪はるだ．．．！！

「違うもんっ」

「すーのファーストキス奪っちゃったしね」

わああああ！！！！

「すーずちゃん、今の話．．．ほんと？」

どこから出てきた！！？

「」「」呉羽さんおはようございます」「」「」

はる、葵、秋夜が声を揃えて挨拶した。

「ねえ、春樹を見るとイラッとするのは

どうしたらいいと思う?..」

「それはどうしようもないです」

「そっだよね、殴ればいいんだよね」

顔引き攣ってるよ、はるさん。

呉羽ブラックオーラ全開だしね。
でもね、

「はる殴っちゃ駄目!!」

はるは殴らせないから!!

意地悪はるだけど、私の好きなはるだから。

「鈴」

「ほえ?」

突然新たな声が聞こえた。
でも知ってる声。

「おはよー杏」

あ、そういえば今は午前10時。

「・・・はよ。雷、大丈夫だったか？」

なんで雷嫌いって知ってるの？

「玲音と知音が焦ってた」

ああ・・・わかってても外せない用事だったって事だね。

「大丈夫。はるがいてくれた」

ふふ、と笑って呉羽に追いかけてるはるを見た。

「・・・っ・・・そうか」

どうして苦しそうな顔するの？

「玲音達は上にいる？」

「ああ。寝てるはずだ」

まあ起きてはいないと思う。
私がいてこないって事は起きてない。

「．．．杏は火焰の総長やって楽しい？」

「ああ」

笑って返事した杏はいい総長だと思う。
でも、“いいな”なんて思っちゃいけない
自分で手放したんだから．．．仲間達を。

「．．．お前は生きてて楽しいか？」

ビクッ

「さあね。でも、玲音や知音、はるが
私の大切な人って事にかわりはないね」

紅や駿、由那、仲間達．．．

それともう会えないけど私の最愛の人。

「俺らが楽しいと思わせてやるよ」

無理だと思っよ。

はる達でさえ出来なかったんだから。

「頑張って」

．．さて、久しぶりの仕事だ。

《Alice、頼んだよ》

「了解しました、ボス」

裏世界トップの殺し屋組織【Trick】
の？1 Alice - アリス - である私。

「今回の標的は．．．？5 King - キング」

馬鹿だね。裏切るなんて．．．

ここは深い森の奥。
なーんも知らない裏切り者は来た。

「久しぶりだな、アリス」

「ええ。さよなら、キング」

それと同時に銃で撃った。
即死できるように・・・痛みを感じないように。
それが私の殺しかた。

「・・・ボス、完了しました」

《相変わらず早いな。処理は任せろ》

「はい。失礼します」

死んだキングの胸に青い薔薇をおいて
立ち去った。

次の？は誰になるんだろう？

「・・・・・・・・。」

実を言うと私がアリスという事は、
はるしか知らない。玲音も知音も知らない。
私の最大の隠し事・・・・・・・・

「ふあ・・・あれ、鈴起きてたの？」

「・・・・・・・・ん」

危な．．アリスの姿を見られたら終わりだ。
てゆうか知音こそまだ起きてたんだ．．

自分の部屋に入ってベッドに倒れこんだ。

「ごめんなさい．．．」

一筋の涙と共に眠りについた。

――――
知音side

「ごめんなさい．．．」

鈴の部屋から聞こえた消えそうな声。

鈴はなにか隠してる、俺らに。

時折見せる、俺らもビビる程の殺気。

鈴は俺らより強い、それはわかってる。

でも、俺らが知ってる以上のモノ。

「鈴．．．」

悪いけど、ちょっと探らしてね。

ガチャ・・・

ゆっくりと鈴の部屋へ入った。

ベッドに近寄り、携帯に触れようとした。

「誰」

「!？」

首にあてられた冷たいモノ。

・・・ナイフ？

「起こしちゃった？ごめんね」

とりあえず俺という事を確認してもらおうと
後ろを振り返った。

「あ・・・知音か・・・」

俺がナイフだと思ったものはなんと
小型のショックガン．．．持たせたっけ？

「鈴、それ．．．どうしたの？」

いや、ナイフも危険だけど．．．

「え？はるが護身用に持つといてって」

春樹、ねえ．．．明日確認しとこう。

それに悔しいけど春樹なら知ってるかも。

鈴が今日の様にたまに夜出ていくわけを．．．

「すーちよつと来て」

まさかの同じ学校だったはると倉庫に。

「なーに？」

中に入ると、葵達のところには行かずに隅に連れてこられ聞いている人がいないか確認してから話しはじめた。

「今日知音さんが、すーにショックガン．．．持たせた？って聞いてきたんだけど」

．．．知音なんか勘づいてる。

「あと、夜．．．何やってるか知ってる？って」

やっぱ昨日のショックガンはマズかった。いつ狙われるかわからない事をやってるから

持つてるんだけど・・・

「・・・昨夜、仕事あったの。

それで家に帰ったら知音起きてて・・・」

昨日の事を説明すると苦笑いした。

「？5、すーが殺ったんだ・・・？」

「うん」

はるがこんな情報を知っているのは、
？3 N i g h t - ナイト - だから。勿論、はるが。

「あいつも馬鹿だ「春樹ー！！こっちこいよー！」

ビクッ

組織の話してる時に声かけられると・・・
ちよっとね。聞かれた！？って焦る。

「すー、行く」

「うん」

ん？あ。総長さん方のおでした。

「すーずーちゃん」

でた。

呉羽がでた。

「また春樹といるの？俺にも構ってよー」

「・・・・・・・・やだ」

てゆうかなんではる下っ端なの？
情報担当とはいえ、殺し屋のNo.3だよ？
杏より強いのに・・・

「春樹ー鈴ちゃん頂戴」

「や・・・それは無理です」

はるの後ろにピッタリくっついて二人の
戦いを観戦。

「はわっ!!」

え、え!?!何!?!なんで浮いてんの!?

「・・・お前、ちゃんと食ってるか?」

「食べてるもん!!」

どうやら後ろから杏に持ち上げられた。

「それより呉羽、俺はなんて言っただ?」

「・・・鈴ちゃんを連れてこい」

「わかってるじゃねえか」

「だから!!今こうして・・・」

「春樹ごともいいつつただろ」

・・・うん、あのね。

担ぎながら階段のぼっていくのやめませんか?

がちや

「．．．おい、なんだこの空気」

「何？双子くん喧嘩でもしたの？」

うわー、この重い空気！！

ものすごく那岐ってやつ居心地悪そう。

「鈴、話．．．の前に武器こつち」

ポケットからショックガンをだして
知音に渡した。

ああ、なんとなくわかった。
話の内容。

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「・・・・・・・・早く話してよ」

誰一人話そうとしないこの状況。

「はぁー・・・早く聞きなよ」

話から聞くに言葉を変えた私を一気にみんなが見た。

「・・・わかってるんだろ？」

「さぁ？」

もう、男がウジウジしていると気持ち悪い！！
さっさと聞くなら聞け！！

「お前、火焰以外の族と関わってるか？」

あー・・・オブラートに包んだねえ。

「違うでしょ？」

「っ！！」

本当に思ってる事、違っでしょ？

「どこのスパイだ。って聞きたいんでしょ？」

まあ仕方ないよね。

だって女子高生がショックガン持ってるし。

「んー．．．でも答えられないなあ」

どこのスパイでもないけど。

それより殺し屋は族に関わらない方がいい。
だからこれは絶好のチャンス！！

「っなんでだよ！！」

あーあ、駄目だよ。

総長がこれくらいで取り乱しちゃ。

「まあ安心してよ。

ココに来るのは今日で最後だから」

知音や玲音を悲しませたくないけど
殺し屋の事バレるわけにはいかない。

「あ。私が怪しいからってはるを
問い詰めるのやめてね」

はるも殺し屋だけど。
でも、ここもはるの居場所なんだから。

「はるの居場所を奪わないでね」

知音からショックガンをとって立ち上がった。

「鈴っ・・・」

ちよつと痛いんですけど知音さん。
腕、痛いんだけど。

「ん？」

まだハッキリスパイって言ったわけじゃない。
でも心のどこかで思ってるでしょ？
だったら否定する意味ないの。

「噓、だよね・・・っ・・・」

「どうだろうね」

笑いながら知音の手を解いてドアノブに
手を伸ばした。

「鈴！！はつきりしろよ！！」

しつこいよ。

自分たちが疑ったんだよ？

「玲音、どいて。出れない」

もーほんとイライラする。

「答えるよ・・・！！俺等が信用出来ないか？！」

肉親とか関係ないんだよね。

たとえ兄妹でも敵は敵、味方は味方。

「いつも貼りつけたような笑顔で、

みてるこっちが苦しくなる!!」

「・・・邪魔って言ってるの」

少し強く言えば大体引く。

「っ・・・鈴」

無理矢理どかして部屋をでた。

こんどはすぐ見つかったはるの所へ行き、
隅っこに連れてった。

「スパイ疑惑かけられた」

「・・・はあああ!?! ちょ、な・・・」

「しーっ!! ここにはもう来ない。

それと、あの家出る」

火焰の玲音と知音がいるあの家にはいられない。

いつかバレる。

「どー住むんだよ」

「今日不動産行こうかと思ってる」

「俺の家住め」

「は？」

いや、お金なら腐るほどあるんだよ！！
もちろん殺しでの収入で。

だから住む場所くらい買えるし・・・

「すーを一人にたくない」

「はるが倉庫に行ってる時は一人だよ」

私はここに来れないからね。

「俺の家に来てくれれば安心できる」

「……わかった。今日からだけど……いいの？」

「い
い
よ」

はるの家と私達の家は結構距離がある。

「じゃあ今から荷物移動させてくる」

「俺も手伝う」

そんなにないから大丈夫だけど・・・

「ん、ありがとー」

「すーこれだけ？」

「うん」

私の持ち物、やっぱり少ないなー．．．
服はお気に入りを2、3着。
後はまあ小物をいろいろ？

「行くよー」

「はーい今行く！ー！」

テーブルに一枚メモを置いて家をでた。

「玲音さん知音さんもパニック起こすよ」

はるの家はちょっと遠いし、

殺し屋だからいくつか家を持っていて
家の特定がされ難いからちよいどいい。

「ふふ、それも面白いね」

確かに、というか絶対パニック起こす。
前に無断で出かけたときは組を動かした。

「また組動かすんじゃない？」

「そうだろうね」

．．．あ、携帯変えとかないと。
今のはGPS付いてる可能生あるし
逆探知とかされたら困る。

「はるー荷物片付けたら携帯買いに行こ」

「念には念をつて？」

「まあね」

それもそうだけど携帯古いし変えどきかなって
思ってた頃だしね。

「俺の隣の部屋、空いてるから使って。
家具は明日でも買いに行こう」

部屋に入るとベッドだけ置いてあつて
後は何もない部屋だった。

．．．家具もそんなに必要ないかも。

「はる、パソコンの繋ぎかたわかんない」

「はいはい。んーと．．．これはここで．．．」

よくわからない線とか色々繋いで
電源を付けると、

「ついたー!!」

設定はバックアップがあるからそれでいい。

「荷物片付けた？」

「うん」

片付けたっというか隅に置いただけ。
．．．家具がきたら置かないとね。

「じゃ、携帯選びに行こ」

「はい」

――――．．．

「わー．．．いっぱいあるね」

「あ、俺のコレだ」

携帯ショップにて選り中。

「はるのこれ？」

「ん。黒だけどね」

じゃー同じやつを白にしよかな？

「すいませーん」

「お決まりでしょうか」

「コレの白く下さい」

それから機種変更して色々設定した。

「はるとお揃いー」

笑うと嬉しそうに笑って頭を撫でてくれる。
この仕草が好き、撫でられると安心する。

「もうそろそろ玲音さん達帰ってるよ。」

探し回ってたりするんじゃない？」

「見つかったも帰らないもん」

現在時刻 9：00 いつもなら帰ってきてる時間。

「すー、いつかはバレるよ」

「はるだって隠してる」

いつかはバレるって事はわかってる。
でも、言いたくない。

自分の妹が殺しをやってるなんて嫌でしょ。

「そうだけど．．．」はる．．．「やっぱり迷惑？」

目の前で人がいなくなるのを見過ごせなくて
咄嗟に言っちゃったかもしれない。

「迷惑だったら別のところ探すから．．．」

そうなれば、はるにも私の居場所は
隠す事になるけど。

「．．．っ．．．そうじゃなくて！！すーは後悔しない？」

玲音さんも知音さんもスパイじゃないって
言えば信じてくれるでしょ？」

「．．．疑われてる時点で離れるべきなの」

玲音達が信じてくれても

それは私をよく知ってるからであって

ほぼ初対面の杏達は無理な話。

女嫌いの那岐なんて尚更だ。

「俺がいるから、大丈夫」

．．さすがだなあ、敵わないよほんと。

「寂しくても俺がいるから」

小さい頃から玲音、知音とは一緒にいたから
離れるのは寂しかったりする。

「はる．．．ありがとう」

知音side

「「ただいまー」」

あれから鈴の事を話合って様子見って事になった。

「鈴、ご飯」

「・・・・・・・・・・」

「すずー？」

「・・・・・・・・・・」

玲音がテーブルを見て固まった。

「おいっ・・・・・・・・！！知音！！」

「？・・・・・・・・っ！！」

なに、これ・・・冗談でしょ？

【ごめんね、さようなら　　鈴　　】

やめてよ、心臓に悪いって・・・

「部屋に、いるよね・・・？」

前も似たような事があつて、

その時は部屋で寝てた。

今回もそうだよね・・・？

「玲音・・・鈴の物が減ってる・・・」

それも鈴のお気に入りばかり。

「嘘だろっ・・・なあ！！」

俺等があんな事聞いたから・・・？

鈴はスパイなんてしないってわかってても心のどこかでもしかしたらって思ってた。

「鈴．．．ッ．．．」

幹部室を出てく時の悲しそうな目。

「．．．探そう」

スパイでもいいから．．．．．お願いだから、
俺等の所に戻ってきてよ．．．

「．．．組は？」

「まだだ」

鈴の居場所を知ってるとしたら一人しかいない。
．．．．．春樹。

「春樹なら．．知ってるよね」

「多分．．」

鈴がいつでも一番で（俺等もそうだけど）、
鈴の側にいて、鈴が頼る。

「春樹に連絡するか？」

「いや、明日もいつも通り倉庫に来るはず。

来なかったら連絡しよう。

今は情報を集めよう」

鈴の携帯のGPSをパソコンでだした。

「．．．っ！！携帯変えられてる！！」

「は！？マジかよ．．．」

GPSがでないだけならまだしも．．．
携帯を変えられて連絡もできない．．．

「．．．．本気だね、鈴」

本気で俺等から離れようとしてる。

「知音、携帯番号調べられるか？」

「ちょっと待って。やってみる」

鈴も一応ハッキング出来るけど、
ほとんどやってないはず……………

「駄目だ……でないっ……」

なのに、なんで？
どうして情報をとれない？

「協力者がいる、もしくは鈴が俺等以上の
技術を持っているどちらかだよ」

協力者なら、春樹ぐらいしか考えられない。
けどそうなる……春樹が俺等以上って事？

「わけわかんねえよっ……」

妹がいないだけで……鈴がいないだけで、
ここまで俺等を取り乱す。

それほど俺等にとって鈴は大事な存在。

「玲音、今日は休もう。明日からは動くから」

「ああ．．．．」

自分のベッドじゃ寝れなくて、

鈴のベッドで寝ようとするとそこには
玲音がすでにいた。

「同じだよね．．．．」

顔も同じ、声も同じ、髪型も同じ。

そしてこんな時の行動も同じ。

それでも鈴と杏達は見分けてくれる。

「せま．．．．」

いつもなら諦めるけど今は無理。

鈴を感じたい。

ベッドに無理矢理入って目を瞑った。

鈴が見つかる事を願って。

「すー起きて、買い物いくから準備して」

「うゝ．．．おはよー．．．」

頭がぼーっとする。

昨日自分の情報にロックかけなおしたし．．．

「着替えたらリビング来てね？」

「はあい」

はるが出てったのを確認してごそごそ
かばんを漁って服をだす。

「眠ーい．．．」

はるside
．．．

「あの呉羽さん今日は用事があつて

倉庫いけません」

《わざわざ電話したのー？別にいいのに》

「一応ですよ」

確かに呉羽さん達もいない時はよくある。
まあ、でも俺は下だから。

《ないとは思うけど、どこかが攻めて来たら
呼び出すかもって事は覚えといてね》

「はい」

《じゃ〜ね〜》

．．．理由とか聞かれなくてよかった。
すーの為とはいえ呉羽さん達に嘘つくのは．．．

「はる準備出来たー」

「こっちおいで、ご飯あるよ」

でも、玲音さんと知音さんには悪いけど
すーを疑うなら俺は嘘をつくよ。

side END

————— . . .

「まだ組は動かしてないみたいだよ」

「そうだね、でもそのうち動かすよ。」

すーがいきなり消えたんだから」

私達が来たのは住んでるとこより少し離れた
大きいモール。

ここなら玲音達に見つかる可能性低いし、
色々種類があって選べる♪

「あはは、見つかったら倒してあげる♪」

はる、顔引き攣ってるよー？
でも本当に倒しちゃうかもね。

「あ、このテーブル欲しい!!」

話をかえて、指さしたのは折りたたみ式の
小さなテーブル。

「それと、後は棚っぱいのいるでしょ？」

「んーじゃあ．．．あれ！！」

テーブルに合う棚を選んで、
この後も買い物するから届けてもらう
事にした。

「次はー．．．すーの服！！俺選んでいい？」

「いーよ」

お金はるが払うみたいだし．．．．
いっぱいあるのになお金。

「すー試着して」

「．．．．．それ？」

「うん」

ニコニコしながら持ってきたのは
ノースリーブの白ワンピースで裾に小さい
ぴんくの花が刺繍されてて可愛い。

「似合わないと思うよ．．．?」

こういうのは由那みたいな女の子が着るべき!!
私みたいなのが着たって．．．．

「いーのいーの!! ほら着て!!」

無理矢理試着室に押し込まれた。

「はあ、仕方ない．．．」

ワンピースを着て、一緒に渡された
レースのカーディガンを羽織る。

「はーるー．．．」

そおっとカーテンから顔を覗かせると．．．

「わお．．．．」

女性客に囲まれてるはるさん。

アレの中心にいる人に声をかける勇氣など
私は持ち合わせておりません！！！！

「．．．．．。」

ぼーっとアレを見ていると、

この店の店員だと思われる男の人が声を
かけてきた。

「その服似合ってますね」

「そうですか？」

お世辞が上手な店員さんですね．．．

「彼氏さんも大変そうですね」

「え？あ、彼氏じゃないですよ」

そう返すと吃驚したようにこつちを見て、

「そうなんですか！？じゃああの人の・・・」

ブツブツなんか言い始めた。

「っはあ・・・はあ・・・すー・・・」

「あ、お帰り」

なんか・・・ドンマイって感じ。
息切れしてるしボロボロだし。

「・・・誰？」

「この店の店員です。」

こちらの商品お買上げでよろしいですか？」

「はい」

く、苦しいんですけど・・・はるさん・・・
店員さんをなぜか超睨んで、
抱きしめてきた。

それから大量に服を買ってモールをでた。

「ありがとうございます」

につこりしてる店員さんとは対照に、
なんか不機嫌なはる。

「はる？どうしたの？？」

怒らせる事したっけ…………？

「…………知らない男についてかないで」

知らない男……………あ、店員さん？

「ついてってない。試着室の前だったもん」

あれは私悪くない！！

はるが囲まれるから悪いんだ！！

「着替えたならすぐおいでよ」

あの状況でー！？

「や、はる囲まれてたし．．．．
女の嫉妬は怖いんだよー！！」

あんなとこに行ったら睨みで殺される！！

「．．．．俺だつて嫉妬する」

「．．．．？誰に？」

どこもはるが嫉妬する要素くない？

「だからー！！すーが他の男といるの嫌！！」

「なんでー？」

そんな事言つたつて私の知り合い男ばつか。

「っ．．．すーが好きだからだよ」

「私もはる大好きー」

いつもならここで抱きつくけど
ここ道端だし玲音達に見つかる前に
帰らなきゃいけないからやめといた。

「（嬉しいやら悲しいやら・・・）」

はるの微妙な笑顔が疑問だったけど
それには触れないことにした。

「真面目に答えてよ、鈴ちゃん!!」

「えー?何の事?」

「っ・・・鈴ちゃん!!」

めんどくさいなあ。

学校こなけりゃよかったー!!
てか呉羽とクラス同じだった事忘れてたし。

「玲音達がどんだけ心配してるかわかってるの!?!」

「さあね(笑)」

気付いてる?

クラスの視線集めちゃってるんですけど。

その中には、

はるの焦った顔と由那の心配そうな顔も。

「生きてるから大丈夫だって!!」

「そうゆう問題じゃないでしょ!!」

春樹!! なんか知ってるんでしょ?」

ちょーつと呉羽さん、やめてくれませんか?
はるに問い詰めるのやめてよ。

「え……あ、……う……」

「春樹、玲音や知音が大切にしてるって
よく知ってるでしょ……?」

自分とこの副総長に嘘ついていいわけない。
でもはるは私の為につくかもしれない。
……そんな事、させたくない。

「……俺は、すーも大切なんです」

肯定と受け取れる答え。
それでいい。

「皆さんには悪いと思います。

でも、俺は何も言えません」

「春樹!!」

「これは、椎名春樹として言ってるんです」

「……。」

呉羽が黙った事で、

教室にはなんとも言えない雰囲気 flowed.

「あ?なんだよこの空気……」

そこに紅が教室に入ってきて

私、はる、呉羽だけが立ってるのを見て溜息をついた。

「なんでもない。授業始めて」

「……ああ。西条、春樹さつさと座れ」

呉羽は不満気な顔だったけど渋々座った。

――――・・・

下校時間、はると裏門で待ち合わせしてる。
だから早く行かなきゃいけない。

「鈴ちゃん!!」

「なーに？」

なのに、まだ諦めない。

「あの話もちゃんと終わってないでしょ!？」

はあ・・・しつこいなあ。
疑ってるならそれでいい。

「どうせもう関わらないからさ、
私が誰だろうと関係ないでしょ」

「玲音と知音は家族でしょ!!」

なにも知らないから言えるんだよ。

「家族だから、大切だから．．．．
知らないままでいいんだよ」

「え．．．．．？」

しまった．．．余計な事言っ
た。

「え！？ちょ、鈴ちゃん！！」

無視して教室をでて、裏門に向かった。

「はるっ．．．ごめん、お待たせ」

「呉羽さんでしょ？大丈夫だった？」

「うん」

まだ肌寒いなか、だいぶ待ってたはずなのに
私なんかの心配してくれる。

「倉庫行くからちゃんと家にいてよ？」

少しでも出かけるんだっ
たら連絡して」

お留守番する子供にお母さんが言うつようなセリフだし。

「ん、わかった。夕飯は？」

「それまでには帰るから待ってて」

よかった．．．とか思ったりする。
一人で食べるのは寂しかったりするから。

「じゃ、行ってくるからいい子にしててね」

ちゅ、と私の髪にキスして出てった。

「暇、だなあー．．．」

私一人しかない部屋はとても静か。
本来の私はあまり喋らないから静かな所は慣れてるけどね。

「はる早く帰ってこないかな．．．」

まだ30分程しか経ってないのにこの言葉。

ご飯作っておこうかな。

材料ないみたいだから買い物に行つて・・・
作れば丁度いいかも。

「えーと・・・電話して・・・」

携帯ではるの番号をだして電話。
ご飯何がいいか聞きたいし。

《プルルル・・・ッ・・・もしもし》

「あ、はる？買い物行くんだけど、
夕飯何がいい？」

《作ってくれるの？

じゃあグラタン食べたい》

「はい」

《帰ったらまた電話してね》

「うん」

やっぱりグラタンか。
好きだからねー・・・

「・・・このままでいいか」

スウェットにＴシャツというラフな恰好
だけど近くのスーパーだしいいよね。

はる魚介類好きだしシーフードグラタンにしよう！って事でエビの殻むき中。

「
〜
」

料理は楽しいから好き。

それにみんな美味しいって言うってくれるし。

「終わったあ！！」

生クリームやら牛乳やらを混ぜたものをグラタン皿に入れて魚介類を乗せてく。上にチーズをかけて、後は焼くだけ！！

「あ、電話してないや」

帰ったら電話してって言われてたのに・・・！！

「やば、」

あんま遅いと心配かけちゃうし。

《プルルル．．．い．．》

「あれー？でないなあ．．．」

《．．．．》

「もしもし、はる？ちゃんと帰ったよ」

ん？返事、無い．．．どうしたのかな？

「はるー？どうしたの？」

《．．．．鈴》

「．．．ッ！！玲音．．．？」

なんで？はるの携帯だよな？

「はるの携帯になんで玲音が出るの？」

《鈴、どこにいる》

「ねえ!!はるどこ!?!」

《俺の質問に答えろよ》

まさか・・・いや、それはないよね・・・

《鈴?ごめんね、玲音苛立ってて・・・》

「知音つ・・・はるは!?!なんで玲音が・・・っ」

もしかしたら、はるが殴られたかもしれない。
自分から携帯を差し出すとは思えない。

《玲音が一発やっちゃったけど・・・》

止めたからちよつと痣になっただけだよ》

・・・ありえない、なんでそんな・・・

「・・・」

《鈴?》

電話を切って家を出た。

もちろん、火焰の倉庫に行くために。

「ふざけないでよっ・・・」

いくら家族とはいえはるを傷付けた
落とし前は付けてもらっよ。

私のバイクを走らせて倉庫へ向かった。

――――

スタスタスタ・・・

倉庫は静かで物音が一つない。

「っ・・・」

倉庫の中では一部に円形が出来てて
その真ん中に杏達、はる、はるを支えてる
葵と秋夜がいた。

「鈴．．．ちゃ、ん？」

周りにいる他の下っ端さん達は、
私に気付くと目を見開きながら道を開けてく。

「はる．．．．．」

はるの右頬が青く腫れていて痛々しい。

「すー、来ちゃ．．．駄目でしょ．．．？」

玲音もヤクザの息子。
いくら殺し屋でも直撃はかなり痛いはず。

「葵、秋夜ありがとう」

私が現れた事に驚いているのか、
頷くだけの二人。

「．．．さて、玲音。何やってくれてんの？」

後ろを向いて睨むと顔を歪ませた。

「っ．．．鈴が出てくから．．．」だから、何？」

杏、呉羽、那岐が驚いた顔をしてる。

冷たい声、冷めた瞳こいつらの見た事無い私。
まあこっちが本物の鈴だけど。

「スパイかもしれない奴なんて

一緒にいない方が好都合でしょ？」

「関係ねえよ！！」

最初に疑ったのは自分達でしょ？

「あのさあ私がどう思われようが

どうでもいいんだけど、

はる傷つけるのは許せないんだよね」

唯一、私の秘密を知ってる人。
全て知ってても同じ様にしてくれる。

「……………玲音、言いたい事わかるよね」

「…………殴らせろってか？」

よくわかってるねえ。

「うん。そういう事」

玲音達も普通にしてくれると思う。
でも、それでも勇気がないんだ。

だから私には、はるだけなの。

「駄目だよ、すー」

「っなんで！！私の所為で殴られたのに！！」

やっぱり誰にも話さず出て行けばよかった。
そうすればはるが巻き込まれなかった…………

「わかってるはずでしょ」

あやす様な声と手を握る温かい感覚に
何も言えなくなった。

「．．．．嫌い」

玲音だけじゃなくて目の前にいる5人に
向けた言葉。

私が殴ったら、避けれたのに態々正面から
殴られたはるの意味が無くなる。

「．．．はる、立てる？」

「大丈夫だよ」

大丈夫なわけないでしょ。

真っ青で腫れ上がってるよ？

「ちょ、おい．．．鈴．．．」

葵と秋夜が慌ててるけどスルーして
はるを手伝う。

「そんな顔しないの。大丈夫だって」

よっぽど泣きそうな顔をしてたのか、
いつもみたいに撫でられてまた手伝う。

「ねえ．．．今度こんな事あったら．．．
覚悟しておいてね」

チラッと横目で玲音達を見て言った。

「ほら、大丈夫だって。泣かないで？」

「ふえ．．．っ．．．だってえ．．．」

家に着いてから耐えきれなくなつて
涙が溢れてきた。

「お腹すいた。グラタン作ってくれた？」

「うん．．．後は焼くだけ」

あんな青くなつてて大丈夫なわけない！！

「じゃあ一緒に食べよう？」

「．．．焼いてくる」

早く治療しないともっと腫れちゃう．．．
焼いてる間にやらないと。

「はる、これで頬冷やしといて」

保冷剤をタオルで包んで渡した。
少しでも冷やしとかないと．．．

「ん、ありがとう」

さっき頬触った時熱もってたし．．．

湿布もいるよね。

「はるー湿布ってどこにあるの？」

「えっと．．．確かその棚に救急箱あるはず」

言われた引き出しを開けると、
たしかに救急箱発見。

「え、わ．．．ちよっ．．．自分で貼れるよ!？」

むう．．．そんな嫌がらなくても．．．

「（拗ねた顔やばい・・・）張ってくれる？すー」

「うん！！」

そおつと貼ったけど少し触れただけで
痛そうに顔を歪めてた。

「はる・・・痛い、よね」

はるが座った正面に膝立ちして視線を、
同じくらいの高さにした。

「っ・・・／／／／」

「熱あるの？」

耳まで真っ赤で・・・結構熱あるんじゃないの！？
おでこを引っ付けて熱を計ろうと・・・した。

「んっ・・・はる・・・っ・・・ふ・・・」

おでこをくつつけた瞬間、
後頭部を引き寄せられて唇が触れた。

「はぁ．．っ．．．．いきなり、何．．？」

「すーがあまりにも無防備だから．．」

今、
“ 挨拶 ” する必要あった．．？

「．．．ねえ、すー他の男とキスしたりしてる？」

「え？玲音とか知音とか駿．．あ、後

呉羽と一回だけ」

そういえば紅はしてこないなあ．．．．
まあ疲れないからいいけど。

「．．．．キスは好きな人とするものなんだよ」

「挨拶じゃないの？」

玲音達、嘘つきじゃんか。

「違う。それに家族とするものじゃないよ」

ええ！？今まで何回もしちゃってるけど・・・

「あ、でもはるだつたら問題ないよね？」

「・・・・・・・・・・説明聞いてた？」

ちゃんと聞いてたし。

「だって家族じゃないし好きだもん！！」

「（好きの意味次第だけど）まあ、うん」

あ、グラタン焦げる！！！！

「わわっ・・・やば！！」

ダッシュでキッチンに向かい、
オーブンを覗くといい感じな焼具合。

「はい！！出来たよ♪」

二人分をテーブルまで運んで、
テーブルを挟んだはるの正面に座った。

「いただきます」

ん、上出来だね。

「シーフードにしてくれたんだ？美味しい」

やっぱり料理したら誰かに食べてもらえると
嬉しいよね。

んで、美味しいって言ってもらえたら最高！！

「ありがとう」

完食してくれて、洗い物も手伝ってくれた。

「はる・・・家、戻ろっかな」

ソファに座りながらボーツとテレビを

見ていた時、ふと思った。

「．．．どうして？」

「はるが殴られたのは私がここにいるから。
だったら戻ればいいのかなって」

家に戻っても今までの様に玲音と知音に
接する事はできないけど．．．

「すーを守るためならこのくらい大丈夫。

でもすーが戻りたいなら俺は止めないよ」

「戻り．．．たくはない」

「じゃあこ」「こんばんわー!!」

．．．．．誰？

「はあー．．．また来た」

「え？え？誰??」

今、抱きしめられてる状態だから

玄関が見えない。

「顔、絶対見せちゃダメだよ」

「う、うん・・・」

本気な顔だったから頷いておいた。

「あつれー？それ彼女だったりする？？
可愛いのー？見せて見せて！！」

・・・わかつちやったよ、誰だか。

「勝手に入るなって言ってるでしょ。」

李央>リオく・・・」

No・4 Black cat まあ・・・チシャ猫・・・かな。

「僕と春樹の仲でしょー！！
で、その子誰？？」

私に異常に懐いてて処女を奪われそうに

なつた事もあり、いつも身の危険を感じています．．．．

「李央に教えたら汚れるから嫌」

「えゝ失礼な！！僕そんなに女の子好きじゃないよー？」

はる．．．絶対バレるよ。

「あれ．．．この香りつて．．．鈴！！」

ほらー！！匂いでわかつちゃうよこの人！！

「なんで春樹の家にいるの？
もしかして監禁されてるとか！？」

「ち、違う違うー！！」

李央は嫌いじゃないけど、
変態DSだからちよつと苦手．．．．

「ちよつ．．．どこ触つてんの．．．！！」

「李央！！すー返せ！！」

李央の膝に下ろされた。

「ん？鈴の胸」

「やあっ……………」

「ふふっ、相変わらず可愛い反応だね」

はるがキレてるよ！！

「悪ふざけが過ぎるよ……李央」

「うーっ!!春樹酷いじゃんかつ

殴らなくてもいいのにー!!」

「うるさい、用無いなら帰って」

はるに思いつきり頭殴られた李央は
頭を抑えて涙目ではるを睨んでる。

．．可愛いだけなんだけどなあ。

「No.5決まったよ。」

そいつら双子で、菜希と琉希って名前。

これまたお互いにベツタリでさあ．．．

俺がちよつと菜希に触っただけで

琉希が超睨んでくんの!!」

ああ．．．うるさい．．．．

「てかね、ずっと疑問だったんだけど

春樹その傷どうしたの?」

うん、まあ気になるよね。

「．．．別に。殴られただけ」

「あははっ！！正面から殴られたわけ！？
なんでまたワザとやられてんの？」

殴られたって聞いて爆笑してるよ．．．
さすがS。

「名誉の負傷だから！！」

「誰？？誰守ったの？」

「すーだよ」

「えええ！？鈴っ！！なんかヤバイ事あったの？」

き、気持ち悪い．．．
肩ガクガクされて脳がグルグル．．．

「李央！！やめないと殴るよ？」

はるが止めてくれて、事情を話した。

「へー．．．面白いね！！」

あ、まだ二人に言う事あつたんだけど
もうそろそろ帰らないと！！」

ええ！！そこまで言われたら気になる！！

「ま、待つてよ李央」

「明日に分かるから！！じゃね！！」

ーバタン！！

「．．．．．」

「．．．．．」

「帰っちゃった．．．」

「馬鹿李央．．．」

はあ．．．と溜め息をついたはるは今の

相当疲れた様子。

「はる、寝る？」

「ん．．．ちよつと待っててすーのベッド
用意してくる．．．」

「や、いいよ！！自分で出来るからっ」

はるが寝ぼけ始めるとヤバイから逃げないと

「じゃあ．．．一緒に寝よ？」

遅かったあああっ！！

「えっ、や．．．その．．．」

「俺と寝るの．．．嫌？」

無駄に色気でちゃったりするんですー！！

「嫌じゃないけどっ．．．」

きつと今、顔真っ赤。
熱いもん。

「じゃ・・・いいよね」

腕を引っ張られて、はるの部屋に到着。
そのままベッドに倒れこんだ途端、
夢の世界へ飛び立っていきました。

「はるー・・・暑いよー・・・」

抱きまくら状態な私は暑くて仕方ない。

「んーっ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・寝よ」

はるの腕から逃れようと試みましたが、
あえなく惨敗。

「．．．ありがと、はる」

玲音に殴られた所にキスして眠りについた。

「（やばい、やばい．．．嬉しすぎる．．．）」

眠る鈴の隣で一人悶えてた事を鈴は知らない。

「ね、ね！！これ！！」

「ん？食べたいの？」

「うんっ」

超視線感じるけど無視！！
反応してたらキリないしね。

「今度行こうか」

「やった！！」

美味しそうなケーキ屋さんを雑誌で発見。
これはいかないとね！！

「ちょーつといい？」

「え？あ、秋夜！！どうしたの？」

凄いな、知らなかったよ。

秋夜と葵って私と同学年なんだね。
しかもクラス同じ。

「どうしたの？、じゃないだろ？」

「そうだよ！！ちょっと俺等本気で

鈴と春樹の関係が怪しすぎる！！」

はい？どこが？てか何が？？

「その話は後でしろ。俺が来たのに
いつまで突っ立ってるきだ？あ？」

紅、それって教師としてどうなの！？

「「神谷っ・・・！！すいません！！」」

「よし。鈴も席戻れ」

「はぁーい」

席についたらHRが始まる。

聞かずにぼーっと空を眺めた。

「叶深李央！！よろしくね」

その自己紹介を聞くまでは。

『ガタンッ』

「二人とも何やってんの？」

はると同時に椅子から落ちた。

いや・・・まさか自分がこんな古い事を
やるとは思わなかったよ・・・

「っ・・・！！！」

まじで驚いてますから。

あれか、昨日言ってた・・・明日になればわかる。

「いい反応だね」

「・・・お前ら知り合いか？」

まあ、叶深は好きな所座れ」

この学校やバくない!?

世界トップの殺し屋がこんな揃うもん!?

まず高校生が殺し屋ってヤバイけど!!

「すーず、学校でもよろしくね」

顔引き攣ってるよ、はるさん・・・
そう言う私も引き攣ってると思うけど。

「・・・・・・・・」

キンコーンカーンコーン・・・

「うわっ!!」

紅が出てった瞬間立ち上がって、
李央の腕を掴んだ。

反対側は勿論はるが。

「・・・あ、鈴・・・待っ」

李央が逃げない様にするのに気を付けてて
玲音や知音達が呼んでるのに気付かなかった。

「．．．で、なんで転校してきてるの？」

「高校くらい行けって言われて」

どうせ行くなら鈴や春樹がいた方が
楽しいなあって思ってた」

“誰”に言われたかなんて聞かなくてもわかる。
私達のボスしかないし．．．

「はあ．．．疲れそう」

「そっかあ春樹も嬉しいかー
じゃ、教室戻ろー」

――――．．．

「ありや、俺等人気者？」

「いや違うでしょ。」

明らかに好奇の眼差しでしょ」

「やっぱ李央は馬鹿だね」

上から李央、私、はるの順番。

「センサー今何やってるんですかぁー」

やば。紅だ。

さっき出てったと思ったのに……
授業の用意取りにいっただけか……

「……テメエ等いい度胸してんじゃねえか」

「鈴〱春樹〱褒められたよ!!」

「……………」

お願い黙れ李央。

ここで喧嘩なんて起こせないからね!?

「……ちつ……班決めるんだよ。」

決まったら班長決めて俺の所来い」

しーんとしていた教室がざわざわしだした。

「俺等は勿論一緒だよー!!」

まあこれは良いとして・・・あれ？
由那一人じゃない？

「ゆーな!! 班決まってるならおいでよ」

「え・・・いいの？」

「うん、もちろん」

ぱあっと明るい笑顔になって私の後ろに着いてきた。

「鈴、誰その子」

「あ、あの・・・本城由那ですっ・・・」

「よろしくね、本城さん」

ふんわり笑うはると対照に、

「女の子増えたー」

喜ぶ李央。

「班長誰にするー？」

「春樹に一票！ー」

「ヤダ」

駄目だよ李央、
そういうの嫌いつて知ってるのにフザと
やるんだから・・・

「仕方ないなあ・・・私やるよ」

そうたいしてやる事ないだろうし。

「すー嫌なら俺やるよ？」

「大丈夫だよ」

はるこそやりたくないのに
こういう事いうんだから・・・

「紅決まったよ」

「あ？ああ・・・メンバーは？」

「はる、李央、由那」

「・・・なあ、鈴」

やっぱり玲音達話したよね。

「お前・・・俺等に何隠してる？」

「・・・秘密」

言えないよ。

「一人で抱え込んでるわけじゃないのは
いいが春樹に言えるのに「紅」何だよ」

「一つ教えてあげる。

はるに私は何も話してない。
でもはるは必然的に知ったの」

意味わからないって顔してる。

「ふふっ、玲音達に言つといて。

> 無駄だよくって」

毎日私の情報ハッキングしようと
してくるけどこっちは私がいるし
ハッキング技術なら私より上をいく、
はるがいるんだよ？

「．．．ちょっと俺お前等が怖いんだけど．．．」

「なんもしてないけどねー」

引き気味な紅にニヤっと笑って
由那達のところに戻った。

「紅さんと何話してたの？」

「はるに言えて玲音達に言えないのかった」

「俺？」

玲音 side

「．．あ．．鈴．．待つ」

鈴の教室に向かおうとしてた俺等の前から
鈴が、否、鈴と春樹が知らない男を掴んで
走り去った。

「．．あいつ、誰だ？」

「玲音知らないの？」

全く心当たりは無い。

「知音．．知ってるか？」

「や、俺も知らない．．」

俺が知らないんだから、
知音も知ってるわけない。

「・・・転校生だよ、あいつ」

情報担当である那岐が興味無さげに言った。

「でも・・・初対面って感じじゃなかったよね」

俺等の周りで、転校生と鈴の関係を
知ってるとしたらやっぱり春樹しかない。
でも転校生と春樹も知り合いっぽい。

それに聞いたところで春樹は絶対に
答えないと思う。

「那岐、春樹を調べ「無理」・・・あ？」

「昨日調べたけど俺等の知ってる情報以外
全部ロック掛かってる」

春樹自身がやったのか、鈴がやったのか・・・

もしくはあの転校生。

「転校生に関しては名前と年齢のみ。」

女は玲音達の持つてる情報のみ。
それと．．．玲音、知音。

お前等は藤宮じゃないだろ」

「「！！」」

いつかは言わないといけないけど、
わかってるけど．．．

「．．．．．どういう事だ」

「．．．確かに俺等は藤宮じゃない」

もう、隠すのも限界だ。
組の方じゃなく、財閥の方をいえばいい。

「俺は峯崎知音」

「俺は峯崎玲音」

気付かれたら言えばいい。

「待つてよ．．．じゃあさ、鈴も峯崎鈴．．？」

「まあ．．．そうなるな」

困惑した表情の呉羽。

「鈴は．．．俺等と血は繋がってないけど」

悲しそうに、目を伏せながら知音が話す。

初めて鈴と会った時はちよつとビビった。

中1には見えないほど無表情で、

儂いほど綺麗だったー．．．

――．．．

4年前のある日

「この人がこれからパパになるのよ。

ほら、鈴。挨拶しなさい」

「．．．藤宮、鈴」

あの日は父さんが異様に緊張してた。
俺等も再婚相手が来る事は知っていたし、

今の母さんを受け入れてた。

でも今日は娘も来ると聞いて俺もちょっと緊張してた。

ミルクティー色の髪は少し癖があつて、透き通った緑の目は光が当たると色が変わって綺麗だった。

「ごめんなさいね、この子人見知りで・・・」

ぼつ、と静かに名前だけ言った鈴はポーツと俺等を見た。

「俺は玲音。よろしく、鈴!!」

「知音だよ。よろしくね」

俺等が鈴を撫でると少し笑った気がした。

「鈴と遊んでくれる?」

「「うん!!」「」」

俺等は鈴を連れて庭にでた。

「鈴、ちよつと待つてて」

俺等お気に入り入りの木陰にあるベンチに
鈴を座らせて俺等はそこを離れた。

「知音、何持つてく？」

「えー．．．とりあえずお菓子？」

クッキーやらチョコやらを箱に入れて
そこに戻った。

「「っ．．．」」

そのベンチで空を見ながら涙を流す
鈴を見て、固まった。

「鈴．．．．．？」

呼びかけるとこつちを向いた。

もうひとつのベンチに箱を置いて、
鈴に近付いた。

「大丈夫、俺等がいる」

「鈴は一人じゃない」

両側から鈴の頬にキスした。

今思えば鈴はあの頃から鈍感だった。

「．．．玲音と知音はいなくならない．．．？」

「ずっといる」

そう言った俺等に鈴は笑ってくれた。
今度はちゃんと。

この後からキスは挨拶だつて言つて
鈴とキスするようになった。

PS・この事を父さんに話したら、

実の兄妹でなければ近親相姦にはならない
から全く問題無い！！って言われた。

場所は変わって4人で春樹宅

「ふふ．．．玲音達への伝言頼んだの」

「なんて？」

「無駄だよ、って」

あー面白い面白い」

みんなして動揺しちゃって。

「鈴と椎名くんって付き合ってるの．．．？」

「え！？」

由那さん．．．？

はるにはもつといい人がいるよ！！

私なんかじゃもつたいない．．．

「ずっと一緒にいるし．．．違うの？」

「由那っち、やめてよ！！」

鈴は僕のなんだから!!」

由那「ちつてなに!?
てか李央のモノになつた覚えはない!!」

「馬鹿猫にすーはあげないよ」

「ば、馬鹿猫じゃないっ!!」

馬鹿猫「ふ、確かに……猫だし……」

「ふ……っ……!!」

「鈴も笑うなあっ!!」

でもはると私の関係ってなんだろう?
友達でもないし……仕事仲間、だけど
それ以上だし……でも恋人でもない。

「深く考えなくていいよ。」

この関係でずっと続いてきたんだから」

「……うん」

いてくれるだけで安心できる存在。

「春樹は鈴にくっつき過ぎ!!」

はるの座ってる足の間には体操座り。

「これが普通。李央はうるさい」

「鈴も拒否ってよー!!」

そういえば由那がいるのに
いつもの癖で……

「なんで?」

拒否る必要はない?
座ってるの私だし。

「僕がやると怒るじゃんか!!」

「だって、はるだし」

「意味わかんない!!」

拗ねてる李央が意味わかんない。

「鈴と椎名くん恋人に見えるよ？」

「そう？」

あれ、なんではる顔真っ赤？

「はるー？熱？」

「だ、大丈夫っ・・・」

焦りすぎでしょ。

「・・・椎名くん、なんかごめんね」

「うつん・・・いつもの事だから」

??なにがー？

「あ、もう7時まわってるけどどつするっ。」

「僕泊まるー！！」

「じゃあ本城さんも泊まってく？」

由那泊まるの！？

「え、鈴は・・・？」

ん？

「あれ、言ってなかった？」

私もここに住んでるよ」

「ええ！？」

なにー・・・？超凝視してくるんだけど。

「．．．．．。」

「．．．??由那?」

「．．．．．。」

「ちょ、何!?」

「．．．．．。」

「う．．．由那あ?」

「．．．ほんとに付き合っていないの?」

いや、そんなに恋人に見えるの?

「う、うん．．?」

「なんで疑問形?ダメだから!!」

鈴が春樹のものなんてっ!!」

こんだけ言われると自分でも
わかんなくなってきた．．

「っ．．．／／／すー、ご飯作るの手伝って」

「あ、うん」

やっぱり熱あるんじゃないの？

「はぁー．．．．．」

「はる？？ご飯作らないの？」

キッチンに入ったら抱き締められて
何故か溜め息。

「作るよ．．．何食べたい？」

「んー．．．由那達に聞いてくる！ー！」

「よろしくね」

リビングまで行くと何やら楽しそうに
話してる。

「ねえ、夕飯何がいい？」

「はいはい！！和食がいい！！」

「由那は？」

「えっと・・・和食でいいよ？」

じゃー魚とか煮物、だね。

「了解しましたー」

魚なにがあつたかなあとか考えながら
キッチンへ戻った。

――――・・・

「まったく、イヤになっちゃうよねえ」

「え？」

「だって僕らがいるのにあんなに
ベタベタしてさあ」

「鈴って誰にでもあんな感じなの？」

「違うよー??春樹だけだよ。

僕が知り合うずっと前から

あの二人は一緒いるらしいよ?」

殺し屋の組織内で出会っより前から・・・

「叶深くんは鈴が好きなんですよ？」

椎名くんから引き離そうとか思わないの?」

「ムリ!!鈴と春樹を敵にしたいくないって!!」

それに鈴はみんなのお姫様だからね」

鈴がいなくなった後、

こんな会話がされていました。

「うまーっ」

「おいしい・・・」

あれだよね、自分が作ったもの
おいしいって言ってもらえると嬉しい
よね。

「よかったね、すー」

「うんっ」

―――

―――

―――

夕食が終わり、由那は入浴中。

李央は仕事が入った。
すぐ帰ってくると思うけど。

「すー」

「なあに．．っわ」

よってリビングには私と、はるだけ。

「はるー？」

「黙って」

「え、．．っん、ふあ．．っ．．」

なに、ソファーに押し倒されて
キスされた。

「声、本城さんに聞こえちゃうよ？」

「バカはる．．っ．．！！！」

はるの家に住む様になってから、
よくキスしてくるようになって

なんかもう慣れた。

「いつもしてるでしょ？」

「今は由那がいるっ」

李央もいつ帰ってくるかわかんないのに！！

「．．．いなかったらいいんだ？」

「．．．．．。」

「嫌？」

「嫌では、ない．．．」

そう答えると驚いた様に見開いたけど
すぐ笑って私の頭を撫でた。

「．．．なに」

「ん？なににも」

何もじゃないでしょ。

笑ってるもん。

「たっただいまぁー!!」

李央の聲がして、すぐ起きあがった。

「あれ？由那っちは？？」

「お風呂」

由那もそろそろ出てくるだろうし。

「てか！！春樹と二人で大丈夫だった？？
なんかされなかった？」

「う、うん・・・」

なんかされたけど。

「近い」

はるが私の肩を掴んでた李央の手を払い、

はるに後ろから抱きしめられた。

「春樹のが近いじゃん!!」

「俺はいいの」

「なにそれっ 僕も触りたい!」

あ、由那。

「えーっと・・・なにやってるの?」

「じゃれあい?」

「「違う」」

むう・・・なんだよう。

「私、お風呂入ってくるー」

「ん?じゃあ俺も」

「っ・・・!!? バカ!!」

「はいはい、ごめんね」

はるの腕の中で暴れる私を宥めながら
笑った。

「遅くなるから行つてきな」

「うん」

お風呂場で服を脱ぐと、鏡に映る私の姿。
腰に十字架に薔薇が巻き付いてる刺青。

これはT r a m pの一員の証であり、
私の決意。

死ぬまでなにかに縛られていく．．．

「ふう．．．」

ずっと玲音や知音と離れてるわけには
いかないけど．．．仕事もあるし、
今は離れてた方がいい。

「はるには迷惑かけっぱなしだし．．．」

わたしは強くてもいつも誰かに
守られてる。

私の気づかない所でも・・・

「逆上せる・・・」

お風呂からでてスウェットを着る。

リビングに戻ると、李央と由那が話してて
はるはソファーで本を読んでいる。

「あー・・・ちよつとすー、おいで」

「??」

近付くとタオルをとられて髪をわしゃわしゃ

「ちゃんと拭いてって言うてるでしょ」

「だって面倒だもん」

「床が濡れる」

「別にいいでしょ」

「ダメだから言ってるんだけど」

．．．．．むー．．．

「拗ねないの。濡らした所ちゃんと拭いといて」

いつも甘やかすくせに（まさかの自覚あり）
こっいつのはきちんとしてるし．．．

「わかった？」

「はぁーい」

雑巾ってどこだっけ？

確かキッチンにあったような・・・

「あははっさすが春樹。

鈴の扱い方よくわかってるよ」

「甘やかすだけじゃないんだね・・・」

由那の言葉に春樹は苦笑した。

「・・・そんなにすーに甘い？俺」

「うん」

「誰が見ても」

せつせと鈴が床を拭いてた時の会話。

――――・・・

――――・・・

――・・・

春樹side

「春樹、鈴遅くない？」

「もう30分は経ってるよ．．．」

床を拭くだけに30分もかかるわけない。

なんかあった？

でも家の中だし．．．

「ちょっと見てくる」

キッチンには．．．いない。

風呂場には．．．いた。

「はあ．．．寝てる」

やめてよ、すーになんかあったら
狂っちゃうから。

「ん．．．」

手を近付けると擦り寄ってくる。

うつすらと目が開き、俺を見て笑った。

「はるー……………」

「！！っ……………／／／」

寝ぼけてるんだろっけど、
抱きついてくる。

「……………すーが悪いんだよ」

「んっ……………は、あ……………っ……………ふ」

そんな目で俺を見て、
そんな声で俺を呼ぶから。

「好きだよ、すー……………」

好きが止まらなくなる。

「んー……………」

抱きしめれば俺の体に隠れてしまうほど
小さくて華奢なのに、背負ってるものは
自分の体よりとてつもなく大きいもの。

その全てがすーの負担にならないように
俺が支える。

――――・・・・・

――――・・・・・

――――・・・・・

「んー．．．ん？」

なんか、あつたかい．．．？

「っ！．．．！李央！？なんでここにっ．．．」

「あ、おはよ鈴」

ぎゃーっ！．．．！

変態李央とベッドにいたりとかありえない！！

「ど、いてっ．．．！」

「やあーだよ、春樹もいないし、
こんなチャンス逃すわけなっ．．．たあ！！」

「はーっ．．．はーっ．．．」

とっさに殴っちゃったっていうね。

「すー？なんかスゴイ音したんだけ．．．
．．．．．どうしたの？」

バツとはるの後ろに隠れて威嚇してみる。

「起きつ李央が．．．おはよって．．．いて」

「．．．．．李央がいた？」

「ん．．．」

私に殴られたところが痛いのか、
頭を抑えてる李央にはるが近づく。

「なにやってんの、変態猫」

「僕知ってんだから！！鈴の首に跡つけ・・・っ」

「うるさい」

・・・？首？跡？

「すーは気にしないでいいから」

「うん・・・？」

まあよくわかんないけどいいや。

「本城さん起きてたよ。リビング行こ」

「はい」

はるにも殴られて涙目になってる李央も
引きずってリビングへ。

「由那おはよー。早いね」

「おはよう。・・・叶深くん、何やってるの？」

ははー由那優しいね。

李央に氣遣わなくていいのに（笑）

「遊んでただけだよ」

「そ、そう．．．」

ヒキツツテルヨー！！

「で、どうする？今日。出掛ける？」

「鈴とお出掛けーっ」

眠いー．．．．．でも由那いるし．．．

「着替えてくるー」

また部屋に戻る。

――．．．．．

――・・・

――・・・

「・・・あ
」

この間雑誌に載ってたケーキ屋さん・・・
食べたいなあ・・・でもワガママ言えないし。
また今度にしよう

「本城さん、あそこ入っていい？」

「うん。おいしそうなお店だね」

・・・・・・やっぱムダか。

「ありがと、はる」

「ん。偉い偉い」

お礼くらい言えるし！！

「僕の意見は聞いてくくはないの？！」

「李央に拒否権無いから」

扱い酷くない？とか言ってるけど無視。

「はる、入る？」

「はいはい」

カラン

わぁ、いろんなのがある！！
全部おいしそう……

「鈴決まった??」

「・・・モンブランとチーズケーキで悩み中」

「私ショートケーキ」

うぬ・・・決めるのが早い。

「すー決まらない？両方頼んで半分こする？」

う．．．言うと思ったけど．．．

「食べたいの頼んでいいから!！」

「いーよ、俺チーズケーキにするつもり
だったし」

．．．別の決まってもそう言ってくせに。

「モンブランとチーズケーキお願いします」

まだ返事してないのに注文してるし。

「さすが椎名くんだね。

叶深くんはもう食べてるってのに」

李央立ち直り早っ!!

「はい、本城さんの。これであってる?」

「あ、うん。ありがとう」

このさり気ない優しさが女子のハートを
掴んじゃうわけですね。

「すー、どっち先に食べる？」

「チーズケーキ！！」

「ん」

一口食べるともうヤバイ。
かなーりおいしい！！溶ける！！

「おいしー」

ここ絶対また来る！！！！

「由那由那！！あげるっ」

「え？」

あのおいしーケーキ屋さんをでて、
まあいろいろブラブラと。

「わ、どうしたのこれ」

「さっき見つけた！！」

由那に似合いそうだったから」

鳥籠と花のチャームがついたストラップ。

「ありがとう、鈴」

「んーん。こちらこそ」

「・・・え？」

ふふ、意味わかんなくていいよ。

「さ、次どこ行くー？」

「李央うるさい」

「酷っ!!」

今はこんな楽しい時間にいたい。

「すー、ちゃんと前向き向いて歩いて」

転ばないことくらいわかってるくせにね。

「じゃ、はるの腕つかむー」

「前向いてって」

「ヤダ」

横にさえ気をつけてればー．．．ドンッ

「わっ、ごめんなさいー!」

「いや、だいじょ．．．鈴ちゃんみーつけー!」

「は?．．．呉羽っ!」?

チッ、面倒なのにみつかったしー

「すず、?」

「．．．知音」

全員集合しちゃってるっばいわ。
最悪ー…………

「ほーこれが噂の火焰？」

「李央は由那連れて帰って」

「へいへーい」

二人がいなくなったところで。

……………逃げていい？

「こら、すー」

「あれ？出てた？」

「……………」
「思いっきり」
「……………」

おおっ……………つっこまれた。

「だって話す事ないもん」

「俺等があるんだよ」

「えー．．．うざあい」

「おまえなあ．．．．．」

玲音と会話してる時にはるは呉羽からお説教をくらってた。

「春樹は幹部補佐！！わかってるの？

俺等がいない時は指揮とれる人がいないと
困るでしょ！！」

「はい」

「秋夜と葵だって心配してるんだから」

「．．．．．すみません」

私が巻き込んだから。

はるの優しさに甘えたから。

はるだけじゃなくもっとたくさんの人にも
迷惑をかけてる。

「春樹も火焰の一員なんだから怪しい奴
といたら危ないだろ」

那岐はわかってるのかな。
なにげない一言が人を傷つけることある、
と言うことを。

「――・・・やめてください」

「は？」

「いくら那岐さんでも、

すーを傷付けるような事は許せません」

玲音に捕まってた私の手をとって
歩き出した。

「はる??大丈夫だよ?那岐の言った事は
気にしてないし」

「.....」

本当なんだけどなあ。

那岐の事なんてどうも思っていないし
何言われようがどうでもいいんだけど。

「庇ってくれてありがとう」

「.....すーは違うのに」

「いって。わかってほしい人に
わかってもらえてるなら」

あの中でも怪しい奴とは思われてても
スパイかもしれないって思ってる人は
いないと思う。

「何があつてもすーは俺の大切な人だから」

こついつ時よく“殺人しても？”って言うけど私達は殺し屋。殺しは当然。

「．．．ん。私もっ」

「よし。そろそろ帰ろうか」

「うん」

帰ったら由那にいろいろ聞かれるんだろうなあ．．．．．めんど。

――．．．．．

――．．．．．

――．．．

正座って．．．正座って．．何！！！！？

「ゆなあ．．まだ怒ってるの？」

「心配したんだから！！」

帰ってきた瞬間説教されて正座させられ
20分経過。

「ほんと何もなかったんだってば」

まず杏達が私やはるに危害を加える事はないだろうし。

「本城さん、ごめんね？」

イケメンはるくんが謝っても効果ナシ。

「二人とももう少しそうしてなさいっ!!」

あう………放置プレイですか。

「足痺れるー疲れたあー」

私達がいるのはリビングではなく、
はるの部屋。

「すー、おいで」

「？」

正座の最中なんだけど。

「なあに」

「ん？気にしないで」

すでに正座を崩してるはるの足の上に
向き合う形でちょこんと座る。

「．．．っ．．ひゃ．．．」

「まだ耳弱いんだ？」

知ってるくせに．．．っ

ワザと耳に息をかけてくる。

「んっ．．．や．．．っ．．．は」

今日はキスしないかなーって思ってたけど
やっぱ一回はあるんだね．．．

でも、今じゃなくてもっ！！

「すーも気付いてるんでしょう？
抵抗しなかったね」

「だって……」

できなかった。

それにしても抑えこまれるもん。

「はるだって気付いててしたでしょっ」
「もちろん」

はるも李央と同じで変態だー！！

「コソコソしてないで出てきたらっ？」

気まずそーな由那と拗ねてる李央。

「お説教された直後にイチヤイチヤ
してんなーっ！！てかキス・・・！！！！」

「な、なんかごめんね・・・？」

なぜ由那が謝る。

「じゃ、大人しく家にいてね」

「はい」

「ん」

はるは呉羽にお説教されてからちゃんと
火焰の倉庫に行くようになった。

それでも必ず週に一日は家にいてくれるし
たまに二日とかいてくれるときもある。

「あ、俺がいない間に秋夜がくるから。
よろしくね」

「うん」

秋夜、ねえ．．．．．

ピンポン．．．

はるが行ってから数十分経った。

「久しぶり」

玄関を開けると秋夜がいた。

「鈴？あれ、春樹いる？」

「ううん。倉庫行つたよ」

もしかしてはる全く説明してないの？

「春樹に呼ばれたんだけど．．．」

「あはは、たぶん私の話し相手に
選ばれたんだと思うよ」

秋夜を選んだのは“私だから”だろうけど。

「はるに信用されてるんだね」

「なんでそう思うの？」

「はるが私に人を、ましてや男を
自分の見えないところで一緒にさせる事
なんてほとんど無いからね」

玲音、知音、李央は普通にOK
紅や駿がギリギリセーフ。

「．．．．大事にされてるんだね」

「まあ、そうだね」

お互いに依存し過ぎてしまっている。

「じゃあさ、鈴が汚れたらどうなるかな」

ソファーに押し倒されて手と足を固定される。

「……………どうなるだろうね」

「この状況から逃げられると思ってるの？」

冷静な私に秋夜が動揺する。

「まさか。ムリ」

普通に考えて男の力には敵わないから。

「まあ、はるにバレたら後悔するのは
秋夜だからね」

処女なわけでもないし。

「あ、あと李央もね」

李央がキレたらヤバい事になるからね。
前キレた時に殴られた奴死ぬ寸前だったし？

「もうそろそろはる帰ってくるし、
離れたほうがいいよ」

「．．．ごめんね、痛かった？」

掴まれてた手首が赤くなってる。
．．．．．痣になるな、これ。

「別に」

「ただいま。すー？」

リビングに入ってきた。

「おかえり」

「俺はもう帰るよ」

そうそう。

痣が見つかる前に帰った方がいい。

「・・・・・・・・・・ちょっと待って」

はいアウトー！！！！

「コレ、何。朝は無かったよね」

「いや、なんでも．．「なくないよね」

怒ってるよー！！

「っ．．．！？な、にやって．．んっ．．あ．．」

痣になつてるところを舐めたりされて
変な感覚になる。

「ちょ．．．っ．．まだ．．しゅ、やいるっ．．は」

見られてるのお構いナシ！？
こっちが恥ずかしいんだけど！！！！

「出てって。今、俺抑えきかないから

秋夜に何するかわかんない」

はるがそついうと秋夜はさつさと
出てった。

「ごめんね、大丈夫？」

「ばか．．．っ．．」

手が解放された頃には力が抜けてはるに寄りかかってないと立ってられない。

「秋夜はやめとけばよかった．．．」

「わかってたでしょ」

秋夜になんかある事くらい。

「そうだけど．．．すーに傷付けられた」

傷付けられたって………

「これくらいなんともないよ」

痛くないし？

「俺がイヤ」

「……………」

なんだそれ。

秋夜呼んだの自分でしょ！？

「李央じゃダメだったの？」

私を傷つけるとかつかないとかだったら
李央の方がいいと思うんだけど・・・

「絶対ダメ。二人きりにしたら何するか
わかんない」

「・・・うん、まあ前科あるからね。
でもなんかするならはるだって結構
危険じゃない？と思ったのは秘密。」

「今日は外で夜ご飯にしようか」

「そっぴや今日外出てないなあ・・・
私引きこもり！！？」

「バイク乗ってくけどすー後ろ乗る？」

「むう・・・自分の乗ったら目立つちゃうし・・・」

「うん」

「ん。じゃ行い」

――・・・

――・・・

――・・・

「・・・は、はるちゃん？」

「ん？」

「なぜに、なんでしょう？！」

私達、Trickご用達のお店。

「おいしいよ?」

「知ってる!!それは知ってるけど」

「このマスター苦手なの!!」

「大丈夫だって。俺いるし。ね?」

「なにその自信!!
どっからくるの!」

「カラン」

「マスター?います?」

「あ?」

「やだあー!!」

「ナイト．．．．とアリスか」

ニヤツて！！ニヤツて笑った！！
悪い事考えてる！！

「あんまりイジメないでくださいね」

「イジメてねえ。遊んでんだ」

はるの後ろに隠れて睨む。

「もうお前らいいかげんくつつけよ」

「え？」「」

くつつく？今くつついてますけど。

「こないだうるせえ猫がキスしてるだの

なんだのギャーギャーと」

「…………あのバカ」

殴ってやる。

こんどあつたらまず殴る。

「はるお腹すいた」

「はいはい、何食べる?」

「また来いよ」

「はい」

「ふえ．．．っ．．．やだ!」

ぎゅ、っとはるの腕にひつついて
半泣きで店をでる。

「ああ、もう。泣かないで。ね？」

ちゅっとなで顔にキスしたり
するする頬を撫でたりしてなんとか
慰めようとしてるはる。

「キス、して．．．」

「っ．．．すー、」

なにも考えなくてすむから。
マスターにされた怖い話忘れてられるから。

「ん．．っ．．ふ、あ．．」

自分からキスをねだったのは初めてで、
いつもより力がある。

「力抜いて．．．」

一回離れてまったく付く。
それが何度も繰り返されて深いキスを
された後は頭がぼーっとしてた。

「ふ．．．すー可愛い、」

「は、る．．．．．」

ゆっくりバイクの後ろに乗せられて、
はるも乗って私の手を腰にまわさせる。

「ちゃんと捕まってるね」

「うん」

――．．．．．

――．．．．．

――．．．．．

「すー、降りて．．．すー？」

マンションに着き、すーに呼びかけるも
無反応。

もしかして、寝てる？

「泣き疲れちゃったかな」

ふわり、とすーを抱き上げて
マンションのロックを解除していく。

ガチャ

「ん．．．はりゆ．．．」

りゅって．．．寝ぼけてる．．．

「すー、ベッドで寝ようね」

「うん．．．」

かわいい、もうほんとかわいい。
理性飛びそう．．．

すーを俺のベッドにおろして
とりあえず部屋をでる。

「や．．．．はるも、寝よ．．？」

．．．．出れなかった。

服の裾を掴んで上目遣いでお願いされた。
無理、おいてくとかできない。

「ん、いいよ」

ベッドに入ると小ちゃくなって
寄ってきたからぎゅ、っと抱き寄せる。

「スー．．．スー．．．」

寢息が聞こえてきて眠ったすー。
じゃ、俺も寝ようかな．．．

「おやすみ、すー」

「ふぁ．．．ゝ？」

「おはよ」

「な、わっ．．．はる？」

「ん？」

ち、近い．．．．

「ふはっ．．．顔真っ赤。可愛いー」

む、なんか仕返ししたい．．．
あ。そうだ！！

ちゅ、

「一緒に寝てくれてありがと／＼」

「っ……………!!」

……………ん？あれ、なにこの体制。
え、なんではるが上に見えるの？

「鈴が悪いんだよ？」

ドクン、

鈴って呼んだっ……………

「ん……………ふぁ……………っはる……………っふ……………」

ちゅ、

リップ音をたてて離れた唇。

「ねえ、鈴は俺のこと、好き？」

「．．．っす、き．．．．．」

離れたばかりの唇に、
はるが指を這わせている。

「それはどっいう意味で？」

「意味．．．．．？」

ちよつと顔を歪めながら聞いてくる。

「仲間と恋人の好きは違うでしょ？」

「うん．．．」

「それで、鈴はどっちの好き？」

わかんない、でも……

誰よりもはるといたら安心できる。

はるが他の女の子といたらモヤモヤなる。
はるに抱きしめられたりキスされたり
すると、もっと……って思う。

「……………ほんと？」

「えっ」

「声にでてたよ」

またか……………あんな恥ずかしい事、
声にだしてた……………

「鈴の気持ちは俺と一緒にだよ」

「……………？」

「好きなんだよ。異性として」

え、え？

異性としてって・・・恋愛感情でこと？

「俺と付き合ってください」

「え？え、あ、はい・・・」

告白がベッドの上って・・・

「もう俺以外の奴らとキスしたり
しないでね？」

ん？あれ、知らないのかな。

「だいぶ前から、はるとしかしてないよ？」

「・・・襲っていい？」

「お、おそっ．．．!?」

なに、襲われるの!?

「んっ．．あ．．ゝ．．いた．．っ．．．」

はるが首筋に顔を埋めて舐めたりしてる
うちに首筋に痛みがはしった。

「今はこれくらいにしようか」

これくらいってどのくらい．．．

「もう俺だけの鈴だからね?」

「うん．．」

正面から堂々と言われると照れる
んですけど・・・

「もうちょっと遊んでたいんだけど、そろそろこの家出ないと」

「え？」

「秋夜がココの事言っちゃったからもうすぐ総長達来るかも」

まだ、まだ捕まるわけにはいかない。

「はる」

「ん、着替えて。早く出よう」

戻ることはいらない。

「ありがとう」

「いいえ。ナイトは守るのが使命ですから」

ふざけたように笑ったはるを見て、
はるの部屋をでた。

「・・・・・・・・急がないと」

もし捕まっても簡単に抜け出せるけど、
玲音達の中の私はそんな事出来ない。

だから、捕まるわけにはいかない。

「よし」

スウェットにＴシャツに着替えて
リビングに行く。

「いける？」

「うん」

ケータイと財布だけ持って家をでる。

「どこ行くの？」

「李央の家」

バイクに乗ったはるの後ろに乗って聞いた。

李央の家ならバレる事はない、はず。

「捕まってる」

「．．．はる、」

「うん、わかってるよ」

もうすぐくる。

「飛ばすよ．．わ、やば」

バイクの音が聞こえてきて、
はるも最初からスピードをだす。

――．．．

――．．．

――．．

「はいはい」

ガチャ

「うわっ！！え、何？どうした？？」

「「お邪魔しまーす」」

驚いてる李央は無視で。

「え、え！？ここ僕ん家！！」

「へーえ、面白い事になってるねえ」

「……………李央」

「はいはい、わかってるって。」

僕は君らを敵にしたいくないんで」

怖い怖い、なんていいながら
肩をすぼめる。

「あと、すーに手出さないでね」

「さあー??どうだろねっ」

ああ、なんでわざわざはるを挑発
するかな……………

「俺の、だから」

「．．．．．なあーんだ。くつついちゃったの？
つまあんじゃないのー．．．．．ま、でも」

なにがつまらないんだ。

「！？や、あ．．．っ」

耳を舐められて出た声。
咄嗟に口を手で覆った。

「．．．．．李央、殺すよ？」

「やだなあー春樹はもつとイロイロ
しちゃってるくせに」

チラッと李央がこっちを見た。

．．．．．首？

「うるさい。俺はいいの」

「なにそれ」

ぎゅ、私を後ろから抱きしめる
はるの腕の力が強くなった。

「油断しすぎ」

耳元で囁かれて、びくんと反応する。

「あー、もうっ！ー！手出さないから」
「で
イチャイチャすんなっ」

「今日だけ泊めてくれればいいから」

明日は学校だし朝早く起きて
一回帰ってから制服とか来てかないと・・・

ああ・・・めんどろ。

「すー？」

そつえば呼び方戻ってるなあ・・・

「鈴・・・何、考えてる？」

「っ・・・、」

いきなり、なんて反則だ。

しかも耳に唇スレスレで、
いつもよりちよつと低い甘い声で。

「いつまでそこにいんのー？
こっち来なよーっ」

李央がリビングから呼んだ。

「ふ．．．行こっか」

ドクンドクンドクン．．．．．

「バカはる．．．．」

私が耳弱いのがかっててやってる。

私の手を引きながら歩くはるに
悪態をついてみる。

「んじゃー僕は仕事あるから留守番
頼んだよ」

李央って案外忙しいんだよね。
でも私やはるにはあんま仕事こないし・・・

「たぶん今日は帰ってこれないから」

それだけ言つとボタンと扉を閉めて
でていった。

「はる、寝てい・・・？」

「眠いの？じゃ、ベッド行こっか」

「ん．．．」

う．．．．ねむ、い．．．．

「、わっ」

はるの驚いた声が聞こえて意識がとぎれた。

――――
春樹 s i d a

「まったく．．．．」

危ないなあ。

ベッドに向かう途中で眠ったすーを
抱きあげながら少し笑う。

「ん．．．」

もぞもぞと俺の胸に顔を埋めて、
気持ち良さそうに寝てる。

「すず、」

小さい時すーは自分の事を“すー”と言ってた
から自然と俺もそう呼ぶ様になった。

だから、“鈴”とあの時呼んだのはほんとう
久しぶりだった。

「はあ．．．」

こんな風に逃げていたって何も変わらない。
すーだって、わかってるのに。

ゆっくりすーをベッドに寝かせて
俺も中に入り、すーを抱きしめる。

「はる．．．」

目を開けたすーの目は潤んでる。

「どうしたの、」

「ふえ．．っ．．．う．．」

ああどうしよう。

泣いてるから慰めなくちゃいけないのに、

可愛いと思ってしまっ。

「っ．．ふ．．んっ．．あ、はっ．．」

「なんで泣いてるの？」

すーにキスして問いかける。

「はるがつ．．．いなくなっちゃ．．っ」

「俺は、ここにいるよ。」

大丈夫、ずっと鈴の側にいるから」

小さく震えながらぼろぼろ涙を零す姿は
あの残酷と恐れられるアリスには見えない。

「ふええっ．．．」

そんなに俺がいなくなるのが怖い？

だとしたら、すごく嬉しい。

でも離れるつもりは無いから、大丈夫。

「すー、こっち向いて」

「な、に？」

上をむいて俺の方をみたすーの瞼にキスして
できるだけ優しく話す。

「すーは俺の事好き？」

「うん．．．」

「俺はね、鈴を愛してるよ」

かあつと赤くなつたすーを撫でる。

「すーが拒否しても側にいるから」

それが、恋人という立場じゃなくても。

「ふふっ．．．ありがとう」

すーが笑ってくれるなら、
俺はどんな事でもしてみせる。

s i d a

E n d

「ん．．．」

「おはよう」

．．．．．はる、

少し笑っておはよう、とかえす。

「制服、取りに行こうか」

「うん」

ベッドから出て昨日着てきたものを着る。

「李央は？」

「まだ。けっこう大変らしいよ」

李央がまだいない事に気付き、
聞いてみるとまだ終わらないらしい。

「．．．．．どうして私たちを使わないんだろ？」

うちのボスだって知ってるはずなのに。

私とはるのコンビは最強だ、って。

「俺らを出すほどでもないんじゃない？」

はるは情報は組織内で一番だけど
強さで私やN O ・ 2 に少し劣るからN O ・ 3 にいる。

「じゃあたいした事ないね」

はるは普段優しいけど仕事のターゲットは徹底的に潰す。

「そうだね。じゃそろそろ行こう」

私の手をひいて李央の家をでる。

「すー、昨日も言っただけ、

俺はここにいるから。大丈夫だよ」

バイクに乗ってはるの腰にいつもより少し強く抱きついた私に優しく声をかける。

「うん・・・」

やっぱり、はるに隠し事できないな。

「いい子、」

わたしの頭を撫で前を向きバイクをふかす。

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

バイクに載ってる間ずっと景色をみてた。
はるも無言で静かだったけど居心地悪いもの
じゃなく、とても落ち着くものだった。

――．．．．．

――・・・

――・・・

「準備できた？」

「うん」

制服に着替えてかばんもって完了！！

「行こっか」

「はい」

私とはるは学校に着き、昇降口にいる。

「．．．．ねえ、はる。よく考えたら今
学校に来るのって危険じゃない？」

たぶん、昨日は夜遅くまで杏達や下っ端くん
達が家の周りを張ってたはず。

私達は一度も姿を現さなかったから
杏達がいた事をわかつてると思われてる。

「仕方ないよ。すーを守るため、だから」

ぎゅ、とわたしを抱きしめて柔らかく笑う。

「……………」ありがとう

「俺と居てくれればいいから。」

周りの奴らの反応は気にしなくていい

また笑って、私の手をひく。

――……………

――……………

――……………

「っ、はる……………」

教室に入るといろんな目がみてる。

別に怖いわけじゃない。

はるの居場所が無くなるかもしれない……………

「大丈夫だよ」

なのに、そう言うてはるは笑う。

「すーがいればいいの」

迷惑しかかけられない私を求める。

「それに火焰はいい所だから」

はるは火焰が大好きだから、

はるに裏切る様な行為させたくない・・・

それには、私が離れるしかないよ・・・

「鈴、余計なこと考えると怒るよ。
俺の1番はずっと鈴だから」

「．．．“すー”と”鈴”を使い分けるのやめてほしい．．．
いきなり鈴って呼ばれるとドキッてなる．．．」

「わかったよ．．．」

「ん、よかった」

やっぱり私をはるから離れられないらしい。

「おっはよーん♪」

「．．．．．うわぁ、きた。」

「鈴ーっ相変わらずいい匂いだねえ」

変態が、きた。

「李央、いい加減に．．．」

ああ、ほら。怒ってるよ、超怒ってる。
はるさんキレちゃうよ．．．．

「はいはいわかってるしー？」

「んっ、．．ふ．．う、んっ．．．」

「鈴は、」

「．．っふ．．んう．．．」

「無防備すぎるの」

いきなりこんなでごめんなさい。
でも、とりあえず、．．．．．苦しいです。

トイレに行って教室に帰ろうとしたら
火焰じゃない不良に絡まれてそれを、
遅い私を心配して探しに来たはるに目撃され
不良をはるがぶっ飛ばし．．．．．この状況。

「ん．．．っ．．．ごめ、なさ．．．っや」

私が触られた事がはるのスイッチを
押してしまったらしい。

「だーめ。ちゃんとわからせないと」

．．．．．あう

首筋舐めたり、耳噛んだり、キスしたり。
廊下の壁に押さえつけられてる。

「わかつ．．．たからあ．．．」

今は人がいないけど学校の廊下。
いつ人が通るか分からない。

「ふふ．．．じゃ、やめてあげる」

「っ．．．はあ．．．」

こ、腰が抜けて立てない・・・

「俺、嫉妬深いの。ゴメンね」

だらん、となる私を支えながら
申し訳なさそうに笑う。

「んーん・・・好き、だか・・・ら」

・・・自分で言ってて恥ずかしくなってきた。

「っ、ぐっ、ぐっ、ぐっ」

「え？」

「可愛い・・・」

ぎゅうと強く抱きしめられてまたまた
苦しくなる。

「は、る．．．苦し．．．んぐつ．．．」

「しー．．．誰か来た」

そりゃ来ますわー！！
「学校ですから！！」

「ー．．．！！」

「．．．た、．．．？」

「．．．、ら」

．．．．．うわあ、最悪なパターン。

「．．．杏さん達だ」

「どうするの？」

この廊下は一本道。

入れる教室も周りには、ない。

え、会っちゃうじゃん。

「……………とりあえず、キスしよっか」

「え……………ん……………は、ふ……………う……………ん」

なにになになになにに！！？
どういう考え！？

「……………あ、」

「「は？」」

「ああ？」

「ちつ……………」

ええええええ！！！！！！

来ちゃったよ！！！！

絶対こつちみてるよ！！

「んっ、んふ．．っは．．」

はるさんやめてーっ！！

「．．．．．春樹、？」

「つか．．．鈴？」

「鈴、だよね．．」

「．．．．」

「．．．．」

ば・れ・たーっ！！！！

「は、る．．．っ．．．も、無理．．．」

「あ、うん。ごめん」

離れた唇の間に糸が引いた。
でもそれが恥ずかしいとか思える
余裕は今、全くない。

「あ、皆さんこんにちわ」

「え、あ、ああ．．．」

何事も無かった様に杏達に挨拶する
はるに玲音、知音、呉羽が戸惑う。

「ふ．．．大丈夫？」

またまた力がはいらなくて足がガクガクな
私は、はるに必死に引っ付いてる。

「ば、ばかはる・・・っ」

そんな私を見てクス・・・と笑うと
私を持ち上げ・・・いや、お姫様抱っこした。

「ちょ、やつ・・・だ」

「今さらでしょ」

そりゃまあキスやらいろいろしちゃってる
私たちにとったら今さらだけど

今は人がいるんですけど!!

「・・・昨日、俺らが来ること分かってただろ」

えー！！

この状態で始めちゃう！？

「．．．なにがですか？」

「なんで昨日帰らなかった」

マジですかー．．．このままー？

「あ、昨日は出掛けてたんすよ」

ね、と私に同意を求めてくる。
だから一応、頷く。

「朝帰って学校来たんで会えなかったんじゃないですか？」

にこ、と笑うはると対照的に
イライラしてる杏達。

「春樹」

「はい」

「昨日、どこにいた」

あらら、総長直々に？

「友達の家、です」

「昨日は春樹以外全員倉庫にいたんだよー」

くーれはさーん目が笑ってませんけど。

「他にも友達くらいいいますよ」

はるさんは笑顔がキラキラしすぎてて怖い！！

「言え。総長命令だ」

「・・・・・・・・・・李央の家です」

こんな情報知った所で、
なにも変わらないんだけどね。

「・・・・・・・・叶深李央か」

「はい」

李央だってバカで変態でも“殺し屋”だから。

「そんな事聞いて、どうするの？」

やっと立ち直った私は問う。

「……………」

「意味のない事だってわかってるでしょ？」

たぶん、もう那岐が調べたはずだ。

それでも何もでてこなかっただろうけど。

「俺らの所に、戻ってくるだけでいい……………」

「ね、鈴……………」

私に伸ばされた玲音の手を止めて、
私に近づこうとした知音を見上げて、
目で・来るな・と言う。

「鈴．．．」

．．．2人とも、痩せた。

もともと細いのに、もつと痩せた。

ごめん、はる。

これは見逃して。

私はポケットからあるモノをだした。

「玲音」

「．．．え？．．．っぐん．．．」

「「「は？」「」「」

周りが変な反応を起こしてるけど無視。

「知音」

「え、鈴．．．っわ．．．」

「「「「は？」「」「」

私はポケットからアメ二つだして
玲音と知音に口移しで食べさせた。

．．．後ろからすっごい視線感じるー．．．
ヤバいなあ、身体もたないかも。

「．．．．．すー、」

「うん、ごめん。行く」

明らかに怒ってるはるの手を握って歩く。

「はる．．．．．」

「なに」

「怒っ．．．てる、よね？」

「あたりまえでしょ」

うう．．．．．

「なんでもするから．．．許して．．．？」

「．．．．．なんでも？」

．．．．．やっちゃった。

「う．．．．．あ、できる事なら．．．」

“「じゃあ、とりあえず帰ろっか」

そう言ったはるに連れられてただいま
ベッドの上。

もちろん、はるの家のはるの部屋。

「あー・・・はるさん？」

「ん？」

「なんでも、するんだよ？」

「うん」

ぎゅ、っと抱きしめられてるだけ。

まあ気持ちいいんだけども。

「大人しく抱かれてて」

「……………変な意味に聞こえるんですけど」

ふふつと笑って私の首に顔を出し埋める。

「これがいいの」

「いつもしてるのに」

「ほら、もう静かにして」

少し力が強くなる。

「はる、」

「ん？……………っ、」

「ありがとう」

うん、ギリギリ。

顔を上げて触れるだけのキスをした。

「……………襲うよっ。」

「さ、お昼寝しよ!!--」

もとの位置に戻って目を瞑る。

「ん．．．．ん？」

あれ？はるが、いない．．．？

「はる．．．．？」

どこかにいるよね。

だってはるは私を置いてったりしない．．

「はる．．．．っ」

「．．．．っ、ごめん！どつしたの？」

うるうる涙が浮かんできたときに
はるが現れた。

「ん．．．．」

両手を伸ばすと、笑って抱きしめてくれる。

「はいはい、甘えん坊だね」

「いなくなったかと思った・・・」

「すーを置いてかないよ」

優しくゆっくりと私を抱きあげる。

「今、総長達がリビングにいるんだよ・・・」

「え・・・」

なんで・・・？

「受付の人、落としたみたい」

落としたって・・・色目ですか。

「どつする？」に「に」いる？」

「・・・行く」

わたしがいなきゃ何も始まらないでしょ？

「ん、じゃおいで」

こくと頷いてはるの後ろにつづく。

杏 s i d a

「はる．．．．．っ」

聞こえた声に春樹が反応した。

「ちょっとすみませんっ」

慌ただしくどこかの部屋に向かっていった。

「鈴．．．．」

「どうしたんだろ？」

あんな風に女に執着しているのは初めてみる。

玲音や知音もそうだ。

「待たせちゃってすみません」

すこしすると春樹・・・と鈴が来た。

――・・・

――・・・

――・・・

「なんの用？」

なんで全員いるわけ？

迷惑つてものを考えてよ・・・

「お前に用はない」

「．．．．へえ．．．．なら、ここにいないくていいよね」

ほんとイラつくんだけど、女嫌い野郎。

「すず、」

リビングから出ていこうとした私を
呼び止めるはるの声。

「．．．．．。」「

仕方ないなあ．．．．

はるの隣に座る。

「俺に用、ですか」

「ああ」

はるが真面目な顔で杏をみる。

「対した事じゃねえよ。」

ただ、女の世話やってねえでちゃんと
倉庫に来てっただけだ」

女嫌い野郎の言葉に、

はるがムツとしたのが表情からわかる。

うん、私もイラッとした。

「女女つてさあ、それで一つみたいな
言い方やめてくれない？」

「女なんていっしょだろ。外見だけ見てる」

じゃあ、男はどうなわけ？

「あんたも結局は同じじゃん。
あんたが嫌ってる女と」

「ああゝ？何がだよ！！」

「あんたも女つて事しか見てない。
その人自身を見てないじゃん」

おっと．．．．口調が変わってた。

「っ．．．．」

「私も、大っ嫌い。そうゆう奴」

図星、か。

「ふあー．．．．」

「ん？眠いの？」

「うん・・・」

いい終わると、眠くなってくる。

「

「いいよ、寝な？」

「ん．．．」

はるの膝に頭を乗せて寝転がる。

「ここじゃなくて、部屋で」

．．．．．はるが呼び止めたんじゃないか。

それに、はるの近くにいたいし。

「やだ。ここで寝る」

「．．．．．はいはい。わかったよ」

笑ったはるに私も笑いかけて、目を閉じた。

――――

――――

――――

「……春樹、お前……」

玲音さんが口を開いた。

知音さんも俺をジッと見てる。

……さすが、すーの事ちゃんと見てるなあ

まだまだ甘いんだけど。

「はい、付き合わせてもらってます」

玲音さんと知音もは怒ったぽい顔になり、
呉羽さんは文句を言い、

那岐さんは無反応、

総長は分かりにくいけど少し不機嫌。

「聞いてねえ！！」

玲音さんが大声をあげると、
すーが声を漏らしてもぞもぞ動く。

「玲音、落ち着きなよ。鈴が起きる」

玲音さんに注意してる知音さんだけど、
イラついてるのはわかる。

「ねえ、春樹。」

俺らに会う前の鈴、どんなだった？」

突然の話の切り替えに首を傾げる。

「春樹と出会ったころの鈴、教えて」

その質問に呉羽さんが不思議そうな顔をする

「言ったでしょ。俺らが鈴と会ったのは、

鈴が中1の頃だって。それよりも前に

春樹は鈴と出会ってるんだよ」

知音さん達は中1。

俺は、まだ小学校にも入学する前の

すーのお父さんが亡くなった日……

春樹 s i d a

「俺が会った頃はまだ小さかったので．．．
でも、優しくて純粋な子でしたよ」

俺が会ったのはすーが一人で泣いてる時．．．

――――．．．

「うつ．．．．ふえ．．．うつ．」

「．．．．？」

夜、パーティーの帰りで、
一人で外を歩いていた。

「うう．．．う．．．おとさん．．．」

通る公園から泣き声が聞こえてきた。

「誰かいるの？」

気になって公園に入るとブランコに座って
一人で泣いてる女の子。

「どうしたの？」

その子の前に立ってしゃがむ。

「だ、れ．．．？」

「僕？僕は春樹！！君は？」

にこつとその子に笑いかける。

「鈴．．．」

「すずっ」

「うん」

話してる間にも鈴の大きな眼からは
ぼろぼろ涙が流れ続けている。

「鈴はどうして泣いてるの？」

「．．．っお父さんが．．．死んじゃっ．．．た」

もつと泣き始めた鈴をぎゅっと抱きしめた。

「はるくん．．．？」

「寂しいの？」

「．．．うん、」

鈴も抱きついてきた。

「じゃあ、僕が鈴の側にいてあげる」

きつと、すーは覚えていないけど、
この時初めてすーとキスをした。

――――．．．

「はる？」

「ん？」

「なんか、いい事あった？」

いつの間にか眼を覚ましたすーが
俺の顔をジッと見てる。

「すーと初めて会った時の事思い出してた」

ふわふわしたすーの髪を撫でる。

「っ…………あ、う…………」

狼狽えるすーを見てにこにこ笑う。

「……………帰るぞ」

杏さんと那岐さんが立ち上がり玄関へ向かい玲音さんと知音さんは
すーをみてて

呉羽さんは溜息を吐きながら、
杏さんに着いて行く。

「はる．．．．．」

すっ．．．と俺の首に腕をまわしてくる。

「っ、」

．．．．．本当、どこまでも優しい．．．

「ん．．．っ」

玲音さんと知音さんの前で、
俺らはキスをした。

「．．．．．」

二人は無言で帰って行った。

すーが言わないのは二人を守るため。

「ん．．．っふ．．．はる．．．んん．．．っ」

すーの甘い声は俺を誘う。

「鈴．．．」

こんなにも、余裕がない。

「だめ、絶対だめ」

「．．．．．私も嫌だけど．．．．．」

「じゃあ問題無いでしょ」

はるに全拒否され中。

「頷いちゃったし．．．．．」

「．．．．．だめ」

実は文化祭があったりするんです。

私のクラスはよくあるメイド&執事喫茶。
クラスの女の子から絶対メイドやってって
頼まれちゃって、頷いた私。

「そういう格好は俺の前だけ」

「っ・・・／／」

ぐいつ、とはるに引き寄せられて
唇が触れそうな距離で話す。

「他の男に見られるとか、だめだから」

そう、はるが言っているのはメイド服。

「鈴は俺の、でしょ」

はるは結構、強引だ。

「ん．．．っはあ．．．、っふ、う．．．っ
「

震える手ではるの服を握る。

「わかった？」

「．．．．．で、でも．．．」

まだ頷かない私に、はるが溜息を吐く。

「．．．．．もっいいよ、」

「え、許し」勝手にして

「え？」

許してくれたんじゃないの？

私から離れてくはるの背中が滲んでく。

「、．．．．．」

ぽろり、涙が零れる。

「っ．．．．．」

声を出さない様にぎゅ、と口を結ぶ。

ばたん、

玄関が閉まる音がして、はるがどこかへ行ってしまったのがわかった。

「は、る．．．．っ．．．、」

着ないって言えばよかったのに。

はるを怒らせてしまった後悔で

ぐつと唇を噛む。

「・・・・・・・・。」

口の中に血の味がする。

ああ、強く噛みすぎだ。

わかっていても和らげられない。

「、すー？」

ふと、上から声が聞こえた。

入ってきた事にも気付かなかったのか。

「・・・・・・・・さつきはごめん。約束は守ら・・・・・・・・」
上向いて、鈴

無理でしょ。

今、上向いたら泣いてたのバレちゃう。

春樹 side

「あー．．．．．」

外に出て空気を吸う。

「．．．．．」

すーがメイド服なんか着たら似合っに
決まってるでしょ。

男がよって来たら俺、キレるけど。

「約束、ね．．．．．」

まあ、俺が引っ付いてればいいか．．．．．。

部屋に入り、すーの所に戻る。

「、すー？」

ベッドの上で俯いたまま、
俺を見ようとしない。

「．．．．．さっきはごめん。約束は守ら．．．、
．．．．．鈴、上向いて」

頑なに俺を見るのを拒否する。

．．．．．そんなの、俺許さないよ

「鈴」

両頬を手で包み顔を上げる。

「っ、泣いたの．．．？」

眼の潤み、頬の跡。

「泣いてない」

エメラルドグリーンの眼がゆらゆら揺れる。

「俺には嘘つかないで」

小さい身体を抱きしめる。

「ふえ．．．っ．．．はるにつ．．．嫌われたくな．．．いつ」

．．．．．。

なにその可愛い過ぎる発言。

「大丈夫だよ、好き。愛してる．．．」

「ほんと．．．？」

潤んだ瞳で俺の顔を覗き込む。

っ．．．．．やば、可愛い．．．．．

「鈴以外、愛せない」

優しくベッドに押し倒してキスをする。

「んっ．．．ふぁ．．．っ、はる．．．っんん」

啄む様なキスから深いキスへと変えていく。

「俺だけみてて・・・」

――・・・

――・・・

――・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0950u/>

白猫

2011年11月13日13時52分発行